私の彼は副社長　　2nd season

内海　さくら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
私の彼は副社長　２ｎｄ　ｓｅａｓｏｎ

【Ｎコード】
Ｎ１５０７Ｙ

【作者名】
内海　さくら

【あらすじ】

ボロボロの商店街で花屋をしていた葉子の土地を買収するために現れた、スポーツクラブ副社長　真純。敵対していたふたりであったが、紆余曲折を経てついに恋人同士となった。買収はされたが、新築のスポーツクラブの顔として花屋の店舗が入る。愛しい彼の元で好きな花束を作り、そして、プライベートでは真純との甘あま恋人生活を期待していたのだが……。「私の彼は副社長」続編になります。

第1話

私の彼は、ＦＩＥ副社長の恩田真純（おんだますみ）。

ここにくるまでいろんなことがあったけど、
今は恋人として彼の隣に立っている。
恋人の私が言うのもなんだけど、彼はイケメン。
スタイルだって顔だってテレビにでも出たら人気が出そうなくらいにビジュアル的に最高の人だ。
あ…もちろん、性格もだけど。

―　ジェットコースターに乗りたい　―

帰国後すぐ、私のために時間をとってくれた真純は、
疲れた素振りも見せず、遊園地へと連れて行ってくれた。
1日パスポートを買い、それで乗り物を制覇してゆく。
お互い遠い昔に行ったきりだという遊園地。
メリーゴーランドの白馬に跨った彼は、驚きが混じった表情で、
ちょっと小さめの白馬に座る私に声をかけた。

「小さい頃は、この白馬も大きく感じてたな。
夜になると、光でキラキラ輝いてね。
まるで、おとぎの国に迷い込んだような気がしていたんだ」

「凄く分かる。私も、乗りたいって何度もお父さんにわがまま言ったもの」

「お父さん？」

「ええ、後にも先にもその時だけだったんだけど、
今でも覚えてる。唯一好きだった父の姿よ」

母は、父のことをあまり話してはくれなかった。
物心ついたときから酒浸りの父、若い時から家族を困らせてばかりいたのだという。
そんな父が、クリスマスの日に遊園地に連れて行ってくれた。
もちろんお金などないから、見てるだけ。

だけど、父はこのメリーゴーランドの前に来て言ったのだ。

『葉子、一緒に乗るかい？』

とても嬉しかった。結局はわがまま言って3回も乗っちゃって。
いつも、荒れる姿しか見たことなかった父が凄く優しくて。

「だけど、最初で最後の姿だった。
その後、家を出て行っちゃったから…」

その話を遮るように発車のベルが鳴り響き始める。
暗い話題に気がついた私は、舌を出すとごめんなさいと言った。
だが、白馬に乗る真純は、ゆっくりと首を横に振ってくれた。

「お父さんは、きっと素直な感情を出せなかった人なんだ。
だから、最後に見たお父さんの姿が本当なんだと思うよ。
葉子さんの事大好きで、君に近づいてみたかったんだね」

真純は、そう言うと手を差し出した。

「手を繋ごうか」

「う…ん」

白馬はゆっくりと滑り出し、波打つように動き出す。
真純の白馬と私の白馬の距離が離れる度彼は指を絡め、
しっかりと手を握り締めてくれた。

私は、彼が大好き。

いつもくじけそうになる私を前向きにしてくれるから。
そんな彼がこんなに近くにいてくれること、幸せに思っていた。

「で、次はジェットコースターね」

日陰のベンチで休憩を取った後、
園内のパンフレットからジェットコースターの場所を見つけた私は
立ち上がっていた。

「あ、ああ……」

真純もまた立ち上がり、私の手を取る。

彼は、メリーゴーランドからずっと手を繋いでいてくれた。
真純の手はとても大きく、掌の筋肉の凹凸が私の手をすっぽりと包んでいる。
こんなにも長く彼と触れ合うことなど今までなかったから、
私の心は有頂天になっていた。
だが、夢のようなひとときはある声によって変わってゆくことになった。

「ち、ちょっと見て」

空港でも、遊園地に来てからも気になっていた周りからの視線。
自意識過剰？
あるいは、自分の洋服に何かがついているのかと思ったが違う。
通り過ぎる女性たちの視線は、真純の姿に向けられていたのだ。

「あの人かっこよくない？」

「足なが～い。まるでモデルみたいよ」

「ドルガバのジーンズ。そんなのが似合う彼なんて羨ましいわ」

初めての体験。

なんだか、自分の恋人を褒められると言うのは、
照れくさいながらもとても気分が良かった。
彼を引き寄せて『いいでしょう！』なんて自慢でもしたくなる。

実際は、小心者でそんなことも出来ないが、凄く優位な地位に立ったような気持ちがした。

だが……。

「でも、なに。彼女はパッとしないわよね」

―　えっ！　―

「しっ、聞こえるわよ！」

き、聞こえるわよって。

……その声すら、しっかり耳に届いているんですけど。

聞こえることを前提で言っていることくらいすぐに分かった。

もちろん、自分でパッとしているなんて思ったことはないが、見知らぬ人から言われるのはかなり凹んだ。

確かに真純とは、身長だってスタイルだって顔だって不釣合い。

そんなこと聞こえるように言われなくとも、身に沁みて分かっている。

「いいんじゃない。だって、あの子どこのブランド着てるのよ。彼の方が可哀想よ。どこの貧乏娘と付き合ってるのかって、周りからみられるのよ」

今日着てきたワンピースは、どこのブランドでもなかった。
だけど、真純との再会にあたりいろんな店を探し回って、
ギリギリの予算で買った服だったのだ。

私は、大きな勘違いをしていたのかもしれない。
今までの視線は、真純への憧れの視線と、
バランスの取れない彼女を持つことを哀れむ視線。
私は、情けなく悲しい気分になった。
貧乏オーラで、彼に迷惑掛けていることに。

真純も、その女性の会話が聞こえていたようだ。
眉根に皺を寄せ私の腰へと手を回したかと思うと、
ゆっくりと振り向き彼女達に言った。

「君たち、見栄えばかり気にしていると肝心なものが見えなくなるよ。
ブランドじゃなくたって似合う服は沢山ある。
見かけばかり着飾って中身がないんじゃ、そっちの方が哀れだ」

共にブランド品で固めた女性達は、お互いの姿を見合った後表情を曇らせた。

「哀れですって!!ひどい……最低男。
貧乏女とふたりお似合いのカップルよ」

「もう行きましょ」

散々なことを言い放った彼女らが、
そそくさと離れて行くのを見送った真純は怒っているかと思いきや、
私の肩をバコンと叩き突然笑い始めた。

「何、泣きそうな顔をしてるんだよ」

彼の励ましが、余計に涙を誘う。
悔しくてたまらなかった。
私のせいで真純は散々なことを言われたのだ。

「だって、真純さん。もっと私がいい服着れたなら、
あんなこと言われなくて済んだのよ」

「そんなこと、気にするな」

「だって…」

私の真剣な表情を見つめた真純は、笑いを止め、
寂しげな表情で私を見下ろした。

「そんなことを言ってると、さっきの女性みたいに心までが貧しく

なるぞ。
君が苦労して買った服、どこがおかしいというんだよ。
人の姿は内面で決まるんだ。ブランドで着飾っていても内面が貧しければ、
どんな高級なブランドでもただの布切れ。
今の服は葉子さんらしくて、よく似合ってるじゃないか」

「もっと、自信を持っていい。君は僕の目に適った人だから」

真純はそう言うと、もう一度手を差し伸べる。

「さっ、行こう！次はジェットコースターだろ？」

「真純さん……、ありがとう」

私は、彼の手をギュッと握り、コクンと頷いた。
その彼の手はひんやりと冷たく、しっとりと汗ばんでいる。
真純の異変に驚いて顔を上げると、眉を下げた彼がいて申し訳なさそうに微笑んだ。

「元気に行こう！君がそんな顔をしていたら、僕はコースターに乗れない」

実は、苦手なんだ……そう呟いてびっくりする。
真純はジェットコースターが苦手なのに、私の希望を通してくれた

のだ。

「ええっ！怖いって、どうして言ってくれなかったのよ」

真純は、林の奥に壁のようにそびえ立つジェットコースターを、あたかも敵と向き合っているかのようにジッと見つめていた。そして、「君のお父さんと同じだよ」と前置きする。

「大好きな君にもっと近づきたい。君が好きなもの、君が嫌いなもの……今日は君の全てを知るつもりだったんだ」

そう言って目を細めた。

嬉しかった。

愛されてるって分かる。

真純のストレートな発言は、私の心を心地よくしてくれる。

「あっ……もちろん」

「えっ？」

そう付け加えると、真純はにっこりと笑い私の身長に身体を合わせ、耳打ちした。

―　夜の君も知るつもりだから……もちろん、分かっているよね　―

彼の艶のある声と甘い吐息が私の耳を擽り、息が苦しくなった。
身震いするほどに過敏になった感覚が誇大妄想を湧きたて、
私の鼓動をドキドキと早めさせる。
紅潮した顔を隠すようにゆっくり頷くと、彼は、自分の胸へと引き寄せてくれる。

「私もあなたのことが知りたい……」

ようやく搾り出した声は、
ジェットコースターのカタカタと軋む音とともに青い空へと吸い込まれていった。

第2話

―　葉子さん……　―

彼の声が耳元で木霊している。
荒い息遣いの彼の声は、いつもより切なげで心をぎゅっと掴む。

―　好きだ　―

間接照明の淡い光に照らされた真純の身体はほのかに紅潮し、
首筋に流れる汗がまるでガラス玉のようにきらきらと光っていた。
そんな彼に見とれながら、彼の厚い胸をなぞってゆく。

そう言えば、彼の肌に触れるのは初めてではない。
プールで溺れそうになったとき、抱き上げてくれた時が初めて。
その時はプールの水温でひんやりと感じた肌、だけど今は違った。

張りがある筋肉質な身体からは、熱すぎるほどの熱を感じて。

「葉子さん…欲しい？」

「うん……」

いたずらっ子のような視線を向けた真純が、私の唇を覆った。
壊れそうなくらいにギュッと抱きしめられると、彼の体温がスッと馴染む。

一緒なんだ…そう思った。

高揚しているのは彼だけじゃなく、私も一緒なんだと。
彼の愛を感じ、彼の身体を感じ、私の身体もまた興奮していた。

「そう…」

「はっ…ん…」

まるで、嗜好品の様に全身を嗜み終わった彼は、
私の身体の線をなぞりながら快楽の園へと向かった。
胎内から湧き上がる聖なる泉がまるでオアシスのように、
私を求める彼を待っている。

「ここ…でしょう？」

真純は、わざとなのか秘密の園より少しポイントを外してなぞってくる。

彼の指で擦られるたび、ゾクッとした感覚が腰から背筋に湧き上がり……今までにない初めての感覚に驚いた。

「い、いじわる……違うわ。もう少し……下」

なぜか声に、力が入らない。

なぞられる度、熱い吐息が唇から漏れ出す。

その吐息を拾い上げるように口づけした真純は、私の耳元でこう言った。

「葉子さん、知らないんだ。快楽のスイッチ」

「すい…っち？」

「そう、その悦びを知れば、もう君は僕から離れられない」

「今でも離れられないというのに？……ああっ！」

スイッチに触れられ電気が走ったように身体がビクつく。
この先に何が待ち受けているのかと思うと、不安と期待で胸がいっぱいになった。

「一昼夜僕のことばかり考えて、きっと仕事にならないぞ」

それでもいい。

頭の中を彼の事でいっぱいにしたい。

「もっと、考えさせて……」

真純の背中に手を回した私は、
汗でしっとりと濡れた身体を引き寄せ縋りつくようにキスを求めた。
彼もＹＥＳという言葉を返すように深いキスを返してくれた。

真純の指だけで弄ばれている女の私がいた。

身体の奥深くに眠っていた獣の感覚を引きずり出されたように乱れ喘ぐ私に
彼は容赦ない快楽を与え続けた。
次第に大きくなる悦びの波に呑み込まれそうになった私は、
背中へ回した手で彼に縋りつく。
ひとりで波に呑み込まれてしまうのが怖かった。

「もう駄目。一緒に、ね……イかせて」

十分に機能し始めたスイッチから指を離し、
感慨深げにため息をついた真純は
「ようやく君とひとつになれるんだな……」
そう呟いて私の肩をグッと掴んだ。
それを合図に、私は全ての五感を胎内へと集中させる。
大好きな彼との繋がりを、その身に刻み込むために。

「葉子、よう…こ」

「真純さ…ん」

髪を乱し名前を連呼する彼の表情が、次第に恍惚としたものに変わりはじめる。
私を感じて陶酔する真純の姿……とても愛しく思えた。

◇

―　一緒に……イこう　―

果てる瞬間の真純の甘く切ない声色、そして包まれたｒｕｓｈの香り。
彼が残した一夜の情事とともに、私の５つの感覚へ刻み付いている。
彼との初情事は、とってもよくって……。

「いっちゃった…」

イッ……ちゃった？
イッちゃった！ねぇ、どうして分かるの？

「ね…ちょっと、葉子！水こぼしてるわよ！！」

「へっ……あ」

詩織のコップに注いでいたはずの水差しの水は、
全く的外れな場所に注がれていた。
テーブルの上は水溜りが出来ていて、
私は、バッグからハンカチを取り出すと、こぼれた水を拭きあげる。
詩織はそんな私を呆れた顔でまじまじと見つめていた。

「彼氏にね。別れよって言っちゃったの……
でも、どうしてあんたがそんなに動揺するわけ？顔赤いし」

「ご、ごめん」

顔から火が出ていた。

真純との目くるめく一夜を過ごしてから、
ちょっとした言葉に反応する自分がいた。
激しい、夜、ベッド、興奮、全く関係ない話でも
全てはあの一夜に結び付けてしまって、正常に生活することが出来ない。
承諾の上だったとしても凄く困っている。

「さては、ま～た副社長のこと考えていたんでしょ。
こんな朝っぱらから…スケベね」

「だよね……気合入れないと」

「でも、葉子。副社長とえっちしたのって2ヶ月も前の話でしょ。
一体あんたたちの仲はなんなのよ。
あいつも仕事が減ったんでしょ、熱々なはずの恋人が
そんなに関係が無いなんて普通ありえないわよ。
こう言っちゃ失礼だけど、もしかしてあんたの彼って…不能…とか？」

―　フッ、フノウ？　―

私の脳内辞書が、パラパラと語句を調べてゆく。

1、出来ないこと、能力のないこと
2、才能がないこと、無能
3、イン○テンツ

「ちょ、ちょっと！違うわよ……だって、仕方ないじゃない！！」

ガシャン！！

椅子から勢いよく立ち上がったせいで、水差しが揺れグラスに当たる。
私は慌てふためきそれらを手で支えた。

「なんだか白熱してるね……あれ、ハンカチで拭いちゃったの？
葉子ちゃん、言ってくれれば俺が拭いたのに…はい、お疲れ様の珈琲をどうぞ」

その話に割り込むように、テーブルへデザイナーズカップが置かれた。

「あ、ありがとうございます」

高級感溢れるブラウンを貴重としたこの紙カップは、大手コーヒーチェーンであるカフェパティオのもの。
そして、目の前にいる葉子よりひとつ年下の男性は、カフェパティオの店長、黒田海斗（くろだかいと）だ。

元羽並の土地だったこの場所には大きなＦＩＥが出来た。
その1階のスペースには花を堪能しながら珈琲や軽食で休憩が出来るカフェパティオが造られた。
通りからも目立つ店舗、私はもうすぐそのテラスで花を作ることになる。

「開店まで後3日だね。どう、準備は出来た」

「はい、お陰様で…あとは、花で埋まるのを待つだけです」

「ちょっと、黒田さん。私も頑張ったんだけど」

黒田と私の視線を切るように詩織が手を翳してくる。
実は、詩織はこの黒田店長に一目惚れしていた。
だから、元彼ともきっぱり別れられたのだ。

そして、こともあろうか、私の店を手伝うと言い始めた。
結局、彼女の押しに負け、花の管理と、花束の配達、
アレンジメント教室時の店番を頼むことにした。
もちろん、給料はＯＬ時代より少ないことを了承してもらってである。

「あ、そうそう。ご苦労様」

「失礼ね。なんだかついでにって感じだわ」

「いやあ、そんなことないよ。詩織ちゃん。じゃ、ごゆっくり」

黒田は、笑って手を上げ踵を返すとバタバタと準備するスタッフとともに
厨房へと入っていく。
その姿を女子中学生のように見守る詩織は、結構可愛かった。

「…さて、それで？
だって、なによ。彼とデキない理由を話しなさい」

頬を紅潮させたままの詩織は、黒田の余韻を引き摺ったまま私を見据える。

仕方なく、私は話を始めた。

第3話

それは、真純が帰国して数日経ったある日、
社長に呼び出されて、真純の実家へと行った。

初めての彼の実家。
それも、家族との顔合わせという一大イベントだ。
彼が買ってくれたカーキ色のチュニックワンピ。あんまり可愛い格好など
したことないから、本当に似合っているのか気になって
彼の車の中ではサイドミラーばかり見ていた。

真純の家は、都会にありながらも閑静な高級住宅地の一角にあり、
広い庭と英国風の3階建ての建物だ。
漆喰風の壁は重厚さが漂い、今はもう無き傾きかけた
羽並の家とは比べ物にもならないもの。

その綺麗な部屋に緊張しながらお邪魔して
彼の両親、そして、妹との顔合わせの後食事をした。
お母さんとも真美ちゃんとも和気あいあいで、
すごく良い雰囲気になっていたのに……。
社長のひと言からその雰囲気は変わっていった。

「葉子さんに今日来てもらったのは、
ちょっとふたりに話をしておきたいことがあったからだ」

「は、はい」

私は、社長の言葉にメインディッシュの牛フィレ肉ステーキを食べるのを止め、
フォークを置いた。真純も、不思議そうな顔をして社長を見ている。

「真純、新しく出来るＦＩＥの支配人として、
課長の山口を起用することにした」

「えっ、山口に？」

そんな話は聞いてないとでも言いたげな表情の真純は、眉根に皺を寄せ、
社長の次の言葉を待っているようだ。

「支配人に適任な人材がなくてな。経験者の山口に白羽の矢を立てたんだ。
……ああ、分かってる分かってる。お前の片腕がなくなるんだ。だから、山口の代わりは優秀な秘書を立てることにしたよ。それと」

社長の咳払いで、その場の雰囲気が一層崩れてゆく。

「新しいＦＩＥは、モデル支店とすることにした。
それでな、インストラクターに真純、お前を入れることにしたんだ。まっ、お前は経験者だからな、優秀なインストラクターを作る手間も省ける」

「どうして僕が」

社長は、意味深な笑みを浮かべてＦＩＥのパンフレットを取り出し広げた。
そのパンフレットにはロスで撮影したのだろう、
金髪美女、美男子へプログラムを教えている真純の姿があった。
ブラックのカンフースタイルもかなりイケてるが、そのフォームが物凄くかっこよくて
うっとりしてしまいそうになる。

「今のフィットネスブームは、お前も分かっていると思う。
それで、我々もアドバータイズに力を入れることにした」

「ａｄｖｅｒｔｉｓｅ……」

「ああ、メディアを巧く使えばかなりの影響力がある。
そのためには、モデル支店イコール看板インストラクターを作る必要があるんだ。
３社のテレビ取材と６社の雑誌取材を入れている。
それを上手くこなせるのは、クラブの全てを知っていてスイムもスタジオどちらも出来るお前しかいないだろう？」

「と、父さん……？」

「今は、社長と呼んでくれ」

真純の声色が変わってゆくのを感じていた。
父の無謀な取り決めに怒りを抑え切れないという感じで。

「社長……本気で、副社長とインストラクターを兼任しろ…と」

「葉子さんに来ていただいて正解だったかな。
恋人の前だと物わかりいいんだな」

「関係ない、受けたくありません！」

声を荒げる彼へ、そして淡々と言葉を返す社長を
私は交互に見つめた。

「いや、もう受ける受けないの問題じゃないんだ。お前にはしてもらう。
しなければ業界1位の我がスポーツクラブは、2位に転落することとなるんだぞ。
ヨガプログラムに力を入れているアサナスポーツクラブに負けるんだ。
メディアはな、お前とアサナの社長を競い合わせたいと言っている。
相手はアサナだぞ！『競争せずに負ける』そんなことを望むお前じゃないだろう？」

真純の表情がサッと曇ると大きな音を立て椅子から立ち上がった。
「葉子さん、行こう」そう言うと、真純は部屋から出て行ってしまった。

さっきまで和やかだった会食の場が、
まるでお通夜の場のようにシンとしてしまった。

そんな静寂を壊すかのように、ソーサーに珈琲カップを置く音が乱暴に響き、
真美の怒った声が聞こえた。

「どうして、お父さんはお兄ちゃんばかり使うの？
看板インストラクターなんて誰でもいいじゃないの。
そんなのになってしまったら……葉子ちゃんが可哀想！」

「わ、私？」

真美に親しげに呼ばれた嬉しさの一方で、真純のインストラクター話に
なぜ自分が出てくるのかが不思議でならなかった。
話が全く見えない。恩田家の視線が集中してしまった私は、苦笑し
「真純さんが兼任することで、私の何が……」と問うた。
その素朴な問いに答えてくれたのは、真純の母であった。

「インストラクターと兼任することで
プライベートの時間が取れなくなることは葉子さんも分かるでしょう？」

「は、はい」

「それに加えて、うちで雇うインストラクターには条件があって」

「条件ですか？」

「そう、恋人がいる子だったら、別れてもらうか。恋人の存在を直

隠しにすること」

「えっ、ひどい」

思わず言ってしまった本音に気付き「すみません」とあやまったが、疑問符は取れなかった。仕事とプライベートは関係ないはずだ。

「酷いでしょ。失礼な話よ」そう言ってくれた真美の言葉に救われる。

そんな私に、社長は追い討ちをかけるような事を話し始めた。

「スポーツクラブは、ただ運動をしているだけじゃ続かない。

そこに楽しみを見出せるから続けられるんだ。

クラブ内で友人を作り苦しい運動の後の楽しみを見出している人もいれば、

インストラクターに支えられ擬似恋愛的な感情に楽しみを持つ人もいる。

鍛え上げた身体を、プロであるインストラクターに評価されたい一心で

頑張る人もいるだろう。恋愛に夢中になるとそんなひとりひとりのニーズを

見落としてしまいがちになる。私は、遊び半分でこの仕事をしてもらいたくないんだ。

特にモデル支店は、ＦＩＥ全支店の模範だからな」

「お父さん！結局は、お兄ちゃんにお客のホスト役をさせると言いたいんでしょ。

そのためには、商売に差し障りのある恋人の存在を消さないといけ

ない。
それを分かってもらうために葉子ちゃんを呼んだ…でしょ？」

―　私の存在を消す？　―

「まっ、真美の言うとおりかもしれないな。真純と別れろなんて言わない。
ただ、君には真純の恋人であるということを隠してもらいたい。
仕事の時だけでいい、後は干渉しない」

―　また、秘密にしないといけないんだ　―

恋人関係を秘密にすることがどんなに心苦しいことなのか、
経験済みで分かっている。
同じ敷地内なのに他人のように接することがどんなに切ないことなのかぐらい
想像も出来る。
だが仕事をする上では仕方がないことだということも分かっていた。
なんだか、真純とのこれからの恋人生活に浮かれ過ぎた私へ、
釘を刺されたような気がした。
真純は、一体どういう選択をとるのだろうか。
『競争せずに負ける』という言葉に動揺した彼、
彼が取る道は……なんとなく想像がつく。

「私は……、私は真純さんの決断に従います。
彼が兼任することを選べば、恋人であることを隠します」

「葉子ちゃん！駄目だって、お兄ちゃんは受けないって言ってる。
そのまま押せば兼任なんかしないわ。
恋人同士が恋人と名乗れないなんて、おかしいでしょ？」

親身になってくれる真美に何度も何度も頷いた。
彼女の興奮を抑えるように大丈夫だと言い、そしてこう伝えた。

「大丈夫。恋人という表向きの名称なんていらない。
心さえ繋がっていればそれで満足よ」

「葉子ちゃん…無理してないの？」

「大丈夫」

百パーセント無理していないかと聞かれれば多分ＮＯだ。
だけど、みんなに心配かけたくはない。
あくまで仕事上のことだけ。休みの日までは干渉しないと言っている。
それを信じ自分を納得させるしかなかった。
私は、椅子から立ち上がり恩田家の家族に深々と頭を下げた。

「今日は、お呼びいただいてありがとうございました。真純さんと話してきます」

そう言って真純の後を追った。

◇

「遅かったじゃないか」

門の前で車を止め待っている真純は、
私の姿を見つけると助手席のドアを開き誘導した。
ふっと香ってくる真純の香りに酔いしれながら、革の座席にもたれ

かかる。
彼も運転席に乗り込むと深いため息をつきエンジンをかけた。

車は、静かに走り出す。

真純は私の方を見ようとせずに、フロントガラスに流れる景色をジッと見つめていた。

「葉子さん、ごめん。せっかくのランチが台無しになった」

「ううん、大丈夫よ。ご両親から話を聞いてきたわ」

「そっか。じゃあ、少し話がしたい…構わないか？」

「ええ」

真純は、私にグローブボックスを開けるように指示をした。
助手席前面のボックスの扉を開けると、『アサナスポーツクラブ』と書かれた
パンフレットを手に取るよう言われる。

私も、ＦＩＥに出店することになってからスポーツクラブのことを研究していた。
『アサナスポーツクラブ』とは、水泳とヨガに力を入れているＦＩＥと同規模のスポーツクラブだ。
イケメン社長じきじき教えてくれるヨガプログラムが女性に大人気ということが有名で、
最近はそのイケメンを売りにしテレビや雑誌を賑わしているらしい。

「アサナスポーツクラブ、私知ってるわ。
テレビでよく宣伝しているスポーツクラブでしょう？」

「ああ」

「アサナの社長は、僕の高校の同級生で仁志田葵（にしだあおい）と言うんだ。
初代社長が亡くなってから若くして社長になった」

真純は、私と顔を合わせようとせず淡々と話してゆく。

「ライバルだった。勉強でも恋愛でも、そして、同業者としても」

「ライバル？」

真純の言った恋愛という部分が気になりながらも、

突っ込みを入れる雰囲気ではなくて、止める。

「だけど、ＦＩＥに仁志田はスパイを入れたんだ」

「スパイ？」

内容はこうだ。
まだヨガブームが始まる前。
当時、プログラムが豊富ではなかったＦＩＥのスタジオにも、
ヨガプログラムを取り入れるため、真純の父が数人の新人インストラクターを募集し、
本場インドまで行き修行した。
帰国後、ヨガ専属のインストラクター配置も完了し、
プログラムを組み込みんだパンフレットも印刷、プログラムを開始する準備を整えたあとに、
修行をした半分のインストラクターが突然辞めてしまったのだ。
結局、突然のことで調整つかぬまま日々が過ぎていった。
その間に、その全く同じプログラムそして、
ＦＩＥを辞めたインストラクターがアサナでヨガプログラムを始めた。

彼らが、仁志田の放ったスパイだったことは後に知った。

そのあと、プログラムの内容を変え、ヨガを始めたが、

アサナの真似をしていると言う風評被害により、客が激減、止めざる終えなくなったのだという。

「スパイだった彼らを見分けることが出来なかったことは僕らが甘かったところだとは思うが、悔しくてね。だから、アサナ…いや仁志田だけには負けたくないんだ」

彼が何を言わんとしているか、すぐに分かった。想像の通り彼は、兼任する道を選ぼうとしているのだろう。

「だけど、そんな感情のまま、社長の思惑に乗せられるのは危険だと思う。昔インストラクターをしていたときは、こんなこと思わなかったんだけど」

車はいつの間にか都市部を抜け、海へと続く一本道を走っていた。真純は、真正面を見据えながらハンドルから左手を外し私の右手を握る。

その手はふわりと浮き上がり、彼の大腿へと下ろされた。筋肉質の大腿が、私の手を力強く支えてくれると、彼も安心したかのようにハンドルを握りなおす。

「君へまた他人行儀な態度を取るなんて、考えるだけでも苦しくて、胸が痛くなりそうだ」

「真純さん……」

車は、路側停車帯を見つけて入ってゆく。

そこは、広がる海を１８０度見渡せる展望駐車場であった。

第3話（後書き）

ａｄｖｅｒｔｉｓｅ。。。広告する，宣伝する
グローブボックス。。。助手席側の収納ボックス

第４話

私達は長い間、止めた車の中でふたりだけの空間を感じていた。

寄せては返す波の音が、まるでＢＧＭのように車の中に聞こえてくる。

遊泳時期はとうに過ぎ、ボードを楽しむ人影だけが見える海を見ながら、

手に感じる彼の掌の温かい感覚に酔いしれた。

だけど、私の胸は圧力をかけられたかのように苦しくて仕方がなかった。

真純が放つオーラがあまりにも切なすぎるのだ。

真正面を見据える彼、きっといろんなことを考えているに違いない。

どれだけ無言の時間が過ぎ去っただろうか。
ようやく口を開いたのは、真純の方で。

「こんなはずじゃなかったんだ……ランチが終わったら、
予約していたホテルで君を堪能するはずだった」

そう言うと真純は、私に覆い被さってきた。
唇を合わせながら器用に助手席の椅子を倒され、
手をギュッと握り締められる。

「どうして、海なんかに来たんだろうな…
こんなところじゃ何も出来ないのに」

フロントガラスを背にした真純は、首筋の方へとキスの範囲を広げながら、
言葉と裏腹にワンピのスカートの裾を探り始める。
淡いカーキの襟元が乱れ、同じ色合いのキャミソールが見え始めると
彼の本気を感じとった私の身体は捩って抵抗を始める。

「やめよう……ねっ、こんなのは嫌…」

割り入れられた真純の右掌のせいで太ももまで捲くれ上がったスカート。
直したくても止められ、もじもじと足を動かしても
余計にスカートは捲くれ上がり、陽の光にショーツが顕となり
……私は、突然の真純の変貌に驚いた。

「真純さんっ！」

強い口調で彼の名を呼ぶと、真純の力は弱まり私を丸ごと抱きしめた。
いとおしむように頬を摺り寄せ首筋にキスを落とされ。
そして、何かを決心したかのように、私の瞳を睨むように見つめた。

「1位の座は絶対明け渡したくない
それが最終的な僕の答えだと言ったら、君はどうする？嫌いになるか？」

真純は、そう告げると助手席の背もたれを戻し身体を翻した。
着ていたジャケットを脱ぐとふわりと私を包みハンドルにもたれかかる。
考えた末の決断、苦しそうな真純の表情に胸がぎゅっと痛くなった。

「ごめん、葉子さん。僕の決断で君を失うんじゃないかと思ったら、いてもたってもいられなくなった。怖かっただろう？」

「ううん…大丈夫、ちょ…っと驚いただけなの」

真純と視線が合うとあまりの恥ずかしさに、目を反らしてしまった。
乱れたスカートを元に戻し、彼の香に包まれながら
ジャケットの奥で乱れを直してゆく。

「どんな選択をしようとも、私はあなたを嫌いになんかならないから
安心して」

ほんのちょっぴり、自分との仲を取ってくれるのではという期待を持ってしまったのも事実だ。
だが、最終的な真純のウエイトは、仕事に置かれた。
既に分かりきったことではあったが、
彼の口から断言されると少しばかり寂しい気もした。
あくまで仕事を無視した個人的な気持ち、
そんな気持ちは心に留めておくつもりだ。

「実は、真純さんの決断に従うって、社長には言ったの」

「葉子さん…」

「私ね、真純さんが取る道はなんとなく想像していたの。
もしかしたら…って思った瞬間もあったけど、
兼任する道を選んだ方が真純さんらしい気がする。
私を取って仕事に身が入らなくなっても困るし、

実際に恋人関係を白紙にするわけでもないでしょう。
心さえ繋がっていれば大丈夫、そんなの堪えられるわ」

「ねっ！」

そう言いながら、私は真純の顔を覗き込みにっこりと笑った。
車内に広がった暗い雰囲気を一掃するように明るく晴れやかに。
彼が安心して仕事に打ち込めるようにいい案を探しまくった。

「そうねぇ、表立って話が出来なければ、こんなのどう？
ＦＩＥに飾るフラワーアレンジに、赤い薔薇を一輪だけ入れておくの。
花言葉は、『情熱・愛情』……そして、たまには赤い薔薇の蕾を挿しておくわ。
これはね『純潔・あなたに尽くす』よ。
あなたに宛てたメッセージから私の愛がいつでも感じれるってわけ、いいでしょう！」

「あ、あぁ…」

月並みかもしれないが、花に託したメッセージは
真純にとって心を突いた提案のようだった。
強張らせていた顔を柔和に崩すと、私の名を何度も呼びながら
ジャケットごと抱きしめてくれた。

「ま、真純さん？」

「ありがとう……本当に嬉しいよ」

そう言われると、単純に喜んでしまう。
この選択でよかったのだと。

「だから、首位の座は守ってね。影ながら応援してるから」

「ああ、もちろんだ。君のためにも絶対負けない」

彼は、１８０度の海原の景色を前に、私にそう誓ってくれた。

その帰り、閃いたと言いながら、
真純は子供のようなはしゃぎぶりで私に言ってくれた。

「よし決めた！葉子さん、一緒に住もう！」

……と。

◇

「Ｔｈｅ　ｅｎｄ．じゃない！何がデキないよ。
一緒に住んでんだから『いつでもどこでも』でしょう？」

真新しい合い鍵をブラブラと揺らしながら、詩織は興味深げに覗き込んでいた。

「まったく、結局は惚気に昼休みを使ったんじゃない。私の昼休み返してよね」

そう言いながら私の掌へ、真純のマンションの鍵を返す。

「それが、彼の家に泊まったのは3週間だけで今はアパート暮らしなのよ」

「はぁ？」

怪訝そうな顔の詩織が見える。

「ふたりの生活が違いすぎて、全く会わないの……。
真純さんが帰宅するのと同時に私が市場に出る毎日。
４ＬＤＫの新築マンションに独りでいるのは寂しいし、
高層の最上階だから、吸い込まれそうに高いし。
ご飯も、彼、自宅では食べる暇ないから作っても無駄になるし。
落ち着かなくて出てきちゃった」

その言葉に、呆れた顔をさらにポカンと口を開けて詩織は言った。

「あんたって根っからの貧乏性ね。
私だったらここぞとばかり優雅に暮らしてるわ。
でも、彼が不在がちの家に住めないということは、
結婚なんか出来ないじゃない。
結婚するということは、その寂しい彼の億ションで
ず～～～と生活するってことなのよ」

「いやまだ結婚なんて…それに、億ションかどうかも」

「例えばよ！あいつが買ったんだから似たようなもんでしょ。
そんなことはどうでもいいの！あなたたち、大丈夫？

富裕層と庶民層、生活スタイルが合わなすぎて、
実は副社長のあいつと相性が合わないんじゃない？」

「冗談言わないでよ」

「冗談じゃないわよ」

……まぁ、庶民層を否定は出来ない。
どう見てもリッチすぎる彼の家は、自分の貧乏性を赤裸々に見せ付けてくれた。

例えば。

1、真純のマンションの近くにはマダム御用達の百貨店の地下食品売り場しかなく、庶民のスーパーマーケットを探して徘徊した事。

2、リビングにある広いソファーの真ん中に座って珈琲が飲めず、床のふかふかの絨毯に正座して飲んだ事。

3、人が立つと自動的に便座の蓋が上がるトイレにカルチャーショックを受けた事。

4、お酒ばかりの部屋が、元羽並の家の茶の間の広さより大きかったこと。

庶民を実感したほんの一例だ。
だけど、生まれ育った生活スタイルが違うだけで、
相性が合わないとかありえるはずがない。

「慣れるわよ。富裕層の生活に慣れたらいいんでしょ。
よし、セレブが似合う女性になろうじゃない！」

「だったらね。まず、その格好でしょう？」

「あっ…」

己の服装をマジマジと見つめると、ハァとため息をついた。
お買い得の品揃えの服、そう言えば遊園地でも
この服で真純を散々な目に合わせたのを思い出す。
彼は優しいから、どんな服でも似合うと言ってくれた。
だが、世の中はそうは見てくれないのだ。
第一印象で判断される時代なのだから。
副社長という地位を持つ真純の隣に立っても
胸を張れるような女性にならないといけないと思った。

「そうね。頑張って磨きをかける。彼から驚かれるように！」

「でも、私の給料はちゃんと確保しておいてよ」

不安げな詩織をからかうために「何とか頑張ってみるわ」と伝えてみる。
詩織は案の定鵜呑みにし、おろおろとしはじめた。

「うそうそ、ダイヤモンドのファッションリングを衝動買いしてしまったんでしょ。ローンが払える程度の給料は確保しておくわ」

「ちょっと、葉子！それじゃ、生活できないわ」

「副社長と相性が合わないなんて言った払いせいよ。さっ休憩終わり！仕事仕事」

クスクスと笑いながら席を立った私は、テーブルの上を片付け花がないちょっぴり寂しいはなみの店舗へ入っていった。
そして、ガラスクリーナーと雑巾を手に取ると詩織の文句の声を聞きながらせっせと掃除を始める。
すると、背中越しに名前を呼ばれた私はくるりと振り返った。

「副社長って真純のことかしら？」

喫茶と花屋の境目に立つ、詩織ではない女性の人影に私は目を凝らした。
黒いジャケットと清涼感をもたらす糊がパリッと利いた白いシャツ、その女性の完璧なスタイルにフィットしたスーツと、仕事が出来るオーラがかっこよくて私の目を釘付けにしていた。

その女性は、眼鏡をそっと外すと端整な顔を柔らかく崩した。

「こんにちは、えっと、葉子さんと言ったかしらね」

「は？はい」

「一度しかお目にかかったことがないから、覚えていなくて当たり前だわ。
真純のラッシュと言ったらお分かりかしら？」

「あ、ＧＵＣＣＩ　の……」

私は、言葉に詰まっていた。

―　そう言えば去年のイブは、平井と過ごしていたな　―

あのイブの日に彼が言っていた言葉を思い出す。
目の前にいる、まるでモデルのような女性。
それは、真純の元カノ平井亜紀だった。

第5話

―　そう言えば去年のイブは、平井と過ごしていたな　―

真純の元カノ。
かつて、彼と時間（とき）を共にし、愛し合った人。

「は、はい。あの時はありがとうございました」

私は、冷静を演じながら彼女へお辞儀をした…つもりだった。
でも、心のドキドキは表に出ていたのだろう、亜紀はにっこりと笑うと
「驚かせてごめんなさいね」と言った。

「今日は、はなみの店長とカフェパティオの店長に挨拶にきたの」

「えっ？」

亜紀が、次の言葉を言おうとした瞬間、
何かを察知したかのように窓越しへと視線を向けた。
ゆっくり微笑み、愛しげな眼差しへと変わるのが見える。
彼女は、後から現れた男性に声をかけた。

「副社長、先に来てしまって申し訳ありません。
羽並さんとは一度お会いしていたので、少しお話をしたくて」

コツコツと鳴っていた革の靴が、カフェを過ぎり花屋のフロアに入る。
ゆっくりと近づき、亜紀の隣でピタリと止まった。

「いや、構わない」

それは、スーツ姿の真純であった。
ネイビーの生地に織り込まれたストライプは彼の知性と上品さを醸し出し、
落ち着いた色の青地のネクタイが彼のクールさを際立たせている。
前髪を上げ綺麗な額が露になる時は、若さを隠し仕事モードになっている時だ。

プライベートで髪を下ろしている真純は、歳よりちょっと若い感じで、
特に寝起きのくしゃくしゃの髪なんかは、凄く可愛く感じるのだけれど。
どんなスタイルでも絵になる彼に、やっぱり私は釘付けになる。

「こちら、ＦＩＥ副社長の恩田です」

堂々とした亜紀の声が花屋に響くと、目の前の現実に引き戻されていた。
彼女の隣に立つ真純。
そんなふたりは、まるでファッション誌のモデル達でも見ているかのように
素敵なのだ。
彼は、穏やかな表情で亜紀を見つめた後、私に視線を向けた。

「羽並さん、こんにちは。準備の方は進んでいますか？」

「あ、は、はい。後はお花が入るだけです」

「先日もお話しましたが、当日はスタッフもバタバタしますので、
オープン２時間前にはフラワーアレンジを仕上げるようにしてください」

「はい、その日は朝６時からＦＩＥ入りしたいと思っています」

「ありがとう。じゃ、ＩＤカードを準備しておこうか。秘書に準備させるので後で受け取って下さい。…平井！」

「はい、すぐに手配いたします。あとは、私（わたくし）が、副社長は取材の方へ」

「ああ」

副社長のＩＤカードを取り出した亜紀は、すぐさま真純の胸元へつける。

「じゃ、羽並さん。あなたのセンスでＦＩＥを素敵に飾ってください。期待してますよ」

真純は目を柔らかく細め、踵を返し颯爽と歩き出した。彼と会話を交わすのは一体何週間ぶりだろうか。とても馴染みのある声なのに、なんだか知らない人のように淡々と他人行儀な会話となった。

「じゃ、はなみさんにはＩＤを取得するための書類を渡しておくわね」

「あ、あの…秘書って」

「あっ、ごめんなさい。名刺を渡してなかったわね」

動揺で気が付かなかったが、亜紀の腕の中には真純が仕事の際持ち歩く
本皮のダレスバックがあった。
そのバッグから書類を、
そして、胸元から名刺を取り出すと私に差し出したのだ。

「あらためまして、ＦＩＥ副社長恩田の秘書で、平井亜紀です。
現在副社長は多忙なので、ＦＩＥに関しては全て私を通してね」

意識しすぎだろうか。
彼女は相変わらずの穏やかな笑みを浮かべながらも、
きっぱりとした口調で言い放った。
まるで、副社長と私の仲を知っていて関わりを断たせるような、
そんな棘のある言い方だ。

「は、はい」

「書類は、封筒に入れて２階事務所のほうに提出して。
１時間後には出来上がるから、ついでの際に事務所から受けとるといいわ。
じゃこれも何かの縁かしらね。よろしく」

「はい、よろしくお願いします」

亜紀は、くるっと向きを変え、ハイヒールを高々と鳴り響かせながら颯爽と出て行った。
それを不信気に見ていた詩織は早速近づいてきて、私の手から名刺を抜き取る。

「平井亜紀？なんだか、怪しい女と思わない。
あいつといる時の態度と葉子への態度全く違うじゃないの。
なんか鼻高々そうで嫌な感じだわ」

まだ、脳裏には亜紀と真純ふたり並ぶ姿が焼きついて離れなかった。
真純を軽く見上げる彼女の瞳と亜紀を見つめる彼の視線が、
なんともいえない雰囲気に包まれていて。
馴染み同士の揺ぎ無い信頼感にも似たオーラに胸はざわざわと騒いでいた。

「だけど、妙にお似合いよね……あっ、ごめん。葉子」

『うそよ！うそ』訂正する詩織の声は、全く耳に入らなかった。
なぜなら、私自身もそう思ったからだ。

美男美女のふたり、阿吽の呼吸で行動会話するふたり、
さり気なく着こなしている高級そうなスーツにアクセサリー、
私と違い全てにバランスが取れているふたりは誰が見てもお似合いだと言うだろう。
私は、手に持ったままの雑巾をバケツに入れ
書類をテーブルに置いた。

「あの人、真純さんの元恋人だから。似合ってて当たり前なの」

「う、うそ！葉子…」

詩織の驚く表情を見ながら、緊張の糸が切れたように、
すとんと来客用のソファーに座った。
ぐらぐらする頭を振りながら正気を保とうとする。

「でも、ほら元が付くんでしょ。今の恋人は葉子なんだから…ね。
あいつも葉子に一途だし」

周りに聞こえないようにこっそりと耳打ちしてくれる詩織に
コクンコクンと何度も頷き返した。

「そうだよね……。信じなきゃね、真純さんのこと……」

『信じなきゃ』だなんて言い聞かせている、
既に弱気になっている自分が嫌になっていた。

◇　◇　◇

ピピッ、ピピッ、ピピピピピ……。

スヌーズ機能をもう何回繰り返しただろうか、
私は目覚まし時計をパチンと叩くとのろのろと起き上がった。
一瞬ここがどこだか分からず、ぼんやりとする。
ようやく真純のベッドだということが理解できると、
ひとりでは広すぎるキングサイズのマットの隣を眺めた。

彼は、忙しいようでほとんど自宅に帰っていないようだ。
洗濯籠の中も空っぽで、
買い置きしている冷蔵庫のミネラルウォーターも全然減っていない。
高級な家電一式揃っているはずなのに生活感の全くない部屋は、寒々としていた。

私は、カーディガンを羽織りパジャマのまま寝室から出るとキッチンへと入り珈琲メーカーのスイッチを入れる。

コポコポと音がし始めると、真純の声が耳に心地よく響いた。

『葉子さん、これ、珈琲豆と水入れなきゃ駄目だ』

『えっ？自動じゃないの』

『ロボットじゃないんだから、手動だよ。一体僕の家を何だと思ってるんだ』

『だって、最新の電化製品ばかりあるじゃない、だからてっきり』

『自動販売機みたいにボタンひとつで熱々の珈琲が出るとでも？……君って面白いな』

珈琲メーカーの使い方が分からなかった私は、
おもいっきり空焚きしてしまい真純から笑われた。
そんな入居した日の出来事がまるで遠い昔のように懐かしく感じる。
次第に香ってくる珈琲の香りに酔いしれながら、
私はソファーに置いていた雑誌をテーブルに載せ、
Ｅｘｅｒｃｉｓｅ１２月号と書いてある表紙を捲った。

ＦＩＥスポーツクラブｖｓアサナスポーツクラブ　徹底比較！

いきなりのカラー見出しに写るスーツ姿の真純は、
カフェをバックに足を組み座っていた。
私は、この取材を野次馬のひとりとして見ていたが、

有名俳優でも見ているようなかっこよさに鳥肌が立ちっ放しだった。

自称スポーツクラブ評論家という真純より年上の女性から
意地悪めいた質問をされても堂々として答えている姿が見事で、
話題が最高潮に盛り上がると彼女にコンバットポーズを教えてあげたりする。
クールな印象の中でふっとこぼれる屈託ない笑顔と
さり気ないボディタッチは彼の戦術のようで、
案の定、ものの十分ほどで女性評論家の心は真純に掴まれていた。

そんな状況を見てようやく、
社長がモデル支店のインストラクターに副社長を選んだ理由を理解したのだ。
彼のことだ、きっとその調子で
その他の雑誌やテレビの取材もそつなくこなしてゆくことだろう。

珈琲が出来上がると、花柄のマイカップに香ばしい液体を並々と注ぎ込んだ。
そして、パン屋のトーストに蜂蜜バターを厚めに塗り、ぱくりと頬ばる。
真純が好きな蜂蜜バターに濃いめの珈琲、
実際にこのメニューを彼と一緒に食したわけではないのだが、
彼から詳しく好みを聞いて次の日から実践し始めたもの。

すれ違いで会えない日々。
だが、真純の存在を表すかのように毎日毎日この瓶の蜂蜜バターが減っている。
それを確認するのがすごく好きだったのに。

そんなバターもマンションを出た日から減ってはいなかった。
彼はこの家にいないとまた現実を突きつけられたような気がした。

―　ＦＩＥ副社長恩田の秘書で、平井亜紀です　―

再びトーストをかじると元カノの姿が頭の中を占領し、喉が詰まった。
胸をドンドンと叩きながら珈琲で流し込む。
自分自身でも嫌になるくらい馬鹿な考えが頭を過ぎっていた。

「自分で墓穴を掘ってる」

この蜂蜜バターも亜紀と一緒に食したのだろうか……と思ったのだ。
そして、夜明けの珈琲を共に飲んだのだろうか……と。
答えを出せばショックに陥ることだと解っていても、
妄想じみた考えを取り払うことが出来なかった。

真純は、彼女のことをどれだけ愛していたのだろう、
彼女にどんな言葉をかけていたのだろう、
そして、なぜ別れてしまったのだろう……。
いろんな『だろう』は昔の関係ない話で、真純が知れば馬鹿なことだと笑うはず。

だけど…。
だけど……。

あまりにもお似合いのふたり、
元カノだとしても今は一番近くにいる女性（ひと）なわけで、
だから、気になって気になって仕方が無かった。

◇　◇　◇

ＦＩＥオープンの日、私と詩織は市場で仕入れを済ませた後
朝早くからＩＤカードを使い、施設の中へ入って作業をしていた。

最後の大仕事。
受付カウンターの隣にあるこの花器スペースだ。

空間を生かしたスペースにある大きな陶器の花器の前にビニールシートを敷き、
その上に花や枝物の入ったバケツを置いてゆく。
ＦＩＥの中で一番大掛かりなフラワーアレンジだ。

「じゃ、店の方の準備は私に任せて。頑張ってよ」

「もちろん！」

剪定バサミをギュッと握り締めるといろんな雑念が取り払われ、頭の中がすっきりとした。

イメージは、都会の人にはなかなか見る機会の少ない紅葉。

私は、ななかまどの枝を持ち上げ花器にあてがうと、じっと見つめた。

別に躊躇しているわけではない。

アレンジの骨格となる枝物は重要なものだから、自分の念を入れるというわけ。

最高のアレンジが出来るよう、ななかまどに息を吹きかけるのだ。

私は剪定バサミを当て、ゆっくりと目を閉じた。

パチン。

その音を合図に、私のアレンジは始まった。

柔らかな視線が向けられているとも知らずに……。

第5話（後書き）

真純の元カノ出現です。
彼女は、『私の彼は副社長』第３３話
『ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ７４６２ｉ／３３／』
チョイ役で出てきます。
彼女との経緯は、真純視点のサイドストーリー（短編）で
近々、ＵＰいたします。

第6話

私は、アレンジに夢中になっていた。

紅葉の特徴でもある紅、黄、緑をこの大きな花器の中に表現してゆく。

花器に当たるライトの位置、影になる位置。

下見でのイメージだけでは表現できなかったこれらのことを再計算しながら

ぽっかりと空いた空間を埋めてゆくこの作業は、

小さな花器や花束では経験できなかったこと。

私はこんな機会を与えてくれた真純に感謝しながら、

この広い空間を贅沢に使った。

「熱い」

寒くて脱ぐことが出来なかったカーディガンを取ると、
額に滲み始めた汗を指で拭いた。

一息つく暇もなく、花を取り花器へ。

広く誰もいないフロアには、私が立てる衣擦れの音と
葉と葉の触れ合う音だけが響いていた。
アレンジが思うようにいかないと、自分をメッタメタに罵った。

「ああ、馬鹿葉子！これじゃ奥行きが取れないでしょ。
一体何年やってんの？……こういう場合は…そうねぇ。
ここをこうしてこうして、こうしてみると……ほら、壁の鏡に映り込んで
奥行きが出てくる…どうして分からなかったかなぁ。全く」

私は、花器の後ろに張られた鏡に映るフラワーアレンジを見つめるとウンウンと満足げに頷いた。

「よし、後は仕上げだけね」

最後に、引き締め役の葉物を色とりどりの空間へ差し込んでゆく。

花器を彩る暖色の空間は、その緑でその鮮やかな色を際立たせ、
殺風景な花器を広葉樹の林へと変貌させた。

「ピタリ、２時間前」

あっという間に真純との約束の時間がきた。
そろそろＦＩＥのスタッフが出勤する頃だ。
私は、祖母、母、代々の形見でもある懐中時計に視線を落とすと、
今朝市場で見つけたお気に入りの赤い薔薇を、最後に挿した。
これはもちろん、真純への『情熱・愛情』を表す秘密のメッセージ。

そして、格闘に近いアレンジは終わった。

アレンジの終了と共に施設内がかなり寒かったことに気がついた私は、
脱ぎ捨てていたカーディガンを慌てて羽織り、
シートいっぱいに散乱した枝や葉を集め始めた。

もちろん、これらも大事な商売道具。
ちょっと飾りにお客が購入してゆく安いミニ花束の色添えとなるのだ。
すると突然、ミニ喫茶にある自動販売機から缶の転がる音がして、
ドキッとした。

「僕だ。そのままでいて」

今の今まで、気配すら気がつかなかった。
その制止した声は、紛れも無く真純のものだった。
突然の想い人登場で、私の頭はパニックとなった。

いつから見られていたのだろう。
もし、全く無防備な状態で、花器と向き合っている自分の姿を見られていたのなら、
マニアックな自分を曝け出していたはず。
散乱した葉を拾い集め続けながら、私の顔は茹蛸のように熱くなっていた。

「僕らの姿は、防犯カメラに映っているから…そのまま続けて」

再び彼の声が聞こえると、私は、真純の姿が見たくて見たくてたまらなくなった。
仕事が一切入っていないことを表している優しい声が、
誰もいないフロアに響いている。
十歩程歩けば手に届くくらいの距離に彼はいて、
自分の姿をジッと見つめていることがその気配で分かった。

―　真純さんに会いたい…　―

だが、その願いは簡単に通じた。
先ほどまで格闘していた花器の奥にある鏡に真純の姿が映っていたのだ。
残念なことに視線は合わなかった。
だが、彼の姿は足の先から頭のてっぺんまで綺麗に見ることが出来て……。

真純は、ＦＩＥスタッフが着ているパープルのジャージ姿に身を包んでいた。
そう、今日から彼は昼間はスタジオのインストラクターとして、
そして、夜間はプールのインストラクターとして活躍することとなる。

「お疲れ様。アレンジいい出来だよ。期待以上だ」

「あ…ありがとう……ございます」

エレベーターから人が来ないか心配し、
他人行儀な言葉を吐きながら周辺を片付けてゆく。
このまま時が止まって欲しいと思った。

「僕は、この殺風景な施設の中で、
会員の人たちに自然の癒しを感じさせてあげたいと思ってる。
だから、君に残ってもらった。
だが、そこまでの君の腕を、ＦＩＥの飾り花だけで埋もれさせるには、

もったいなかったかもしれないな」

「いいえ、そんなことはないです」

彼の声をもっともっと耳に入れておきたかった。
なんでもいいからもっと話をして…と願った。

「こんな大きな花器でアレンジする事なんて初めてだったから、とても勉強になったんです」

「そう、よかった。僕もプロのＦｌｏｒｉｓｔ（フローリスト）の技を十分に楽しませてもらったよ。身体が冷えただろう。缶珈琲をテーブルの上に置いておくから片付けが済んだら、飲むといい。
時間内に済ませてくれてありがとう」

カコン…。

アルミ缶がテーブルに置かれる音がした。

彼の行動の一部始終が鏡に映った。
テーブルから離れた彼は、自分の空き缶をゴミ箱へと捨てている。
その後鏡の中からスッと消えた。

「……それと」

真純の声が小さくなった。

離れてゆく……エレベーターに乗って副社長室に行くのだと思うと、彼に縋りつきたくてたまらなくなる。

「同じ味のはずのはちみつバターが、今朝はとても美味しく感じたんだ。

一体なぜだろうな……」

「えっ」

―　真純は、あの後マンションに帰っていた！―

「あ…、副社長！」

機械的な「ドアが閉まります」との言葉と同時に、私は振り返っていた。

閉まりゆく扉の向こうでは、穏やかに微笑む真純の姿が見えた。

胸が熱くなり、目頭が熱くなる。

彼は、帰って来たのだ。

珈琲の残り香、減ったはちみつバター、

そして、テーブルに開きっぱなしだった雑誌を見て、
私が泊まった事を理解したのだ。
きっと、雑誌に映る自分の姿を見た真純は、
照れ笑いながらこう呟いたにちがいない。

『こんな本、わざわざお金を出して買わなくとも貰ってあげたのに
全く、葉子さんって人は』

―　同じ味のはずのはちみつバターが、今朝はとても美味しく感じたんだ　―

たかがバターで大げさな妄想かもしれない。
だけど、それで私を感じ想い焦がれてくれたことがとても嬉しかった。
私と同じ感覚で見ていてくれたことに感動した。
それよりも何よりも、彼との心の繋がりに触れることが出来たのが一番の喜びだった。

―　真純さん、私頑張る　―

なんだか無性にやる気が出てきた。
単純だと思われても、それが私だから。

◇　◇　◇

「ありがとうございました。お気をつけて」

お昼最後の客を送り出した後、ふらふらと椅子に座った。
代々のはなみの店先を見つめ続けてきた丸椅子。
そういえば、真純は花屋に来ると必ずこの椅子に座り、
目を閉じて休憩していたっけ。
私は、そんな懐かしい昔のはなみ花屋を思い出しながら店先を眺めていた。

あの頃と違い、商店街は見違えるように綺麗になっていた。
茶色いレンガで敷き詰められた通り、なんとかという有名デザイナーが設計した
アーケードは凄く都会的な雰囲気で、開通して2週間、人は溢れ活気に満ちていた。

もちろん、人が増えれば売り上げも相当なものだ。
花屋目当てで来る人もいれば、カフェやＦＩＥの帰りに
ほとんど『買っていこうかしら』のノリで購入してくれる。
きっと、亡くなった祖母や母が見たら腰を抜かすくらいに、
今このレジには多くの札が入っていた。

「葉子、秘書から呼び出しよ。３階のカサブランカの花、
花粉取ってないって、超ご立腹よ」

「えっ？カサブランカが」

ほとんど休憩する暇も無く、ＦＩＥからの呼び出しがかかった。
カサブランカの雄しべに付く花粉は衣類に付くと取れないため、
ティッシュで落とすか花粉だけ切り落とすことにしている。
だが、３階のカサブランカはまだ蕾だったはず。
長年の勘では、開花は明日のはずだった。

「申し訳ありません！」

階にたどり着いた私は、亜紀に謝りながら花器の場所を見て驚いていた。
今朝までは、日の当たらない北向きのスペースにあったはずの花器は、
なぜか南側の窓際に移されていたのだ。
ポカポカな日差しのあたる場所に置かれたカサブランカは、

短時間で真っ白な花弁を四方に広げていた。
ＦＩＥのスタジオが入るこのフロア。人が多く行き交うこの場所、
花粉被害が起こらなかったことに胸を撫で下ろした。

「別に怒っているわけではないのよ。ただ、お客さまに付いたりでもしたら
どう責任を取るかということ。有能なフローリストなのにこんな単純ミス
……あなたを押している副社長の顔もあるから注意して欲しいの」

「本当に申し訳ありません」

私はＦＩＥ会員の興味深げな視線を一身に浴びながら、頭を下げた。
なぜ、花器が移されたのかは分からないが、
全てはこの人の多い場所にカサブランカを置いてしまった自分の判断ミスだ。

「少しアレンジも崩れているようだから、手直しして。
くれぐれもお客さまの邪魔にならないように」

「はい」

私は亜紀に一礼すると、腰につけたフローリストケースからハサミを取り、
花粉の部分を切り始めた。

土曜日のジムとスタジオは、多くの会員がいた。
広く明るい室内でみな活き活きと運動をしている。

黙々とマシンをこなす人や、インストラクターと楽しげに会話している人、
そして、ガラス張りのスタジオでは、人気のボディコンバットが始まろうとしていた。
視線は自然と愛しい人を探し当てる。
カンフースタイルの真純は、スポーツ飲料をひとくち飲むとヘッドマイクを合わせた。

何を話しているか防音で聞こえないが、
会員の男女は時に笑いが入りながらも真剣に聞き入っていた
そして、彼が右手を上げると同時にズンとした振動が
床から身体に伝わってきたのだ。

音楽が始まった。

心臓がドキドキと逸った。
何が起こるのか期待でいっぱいとなった。
だが、いつの間にかジムとスタジオとを仕切るガラスの壁にはタオルを持った女性達が取り囲み……結局、真純の姿は見えなくなってしまった。

私は、移動していた花器を元に戻すとゆっくりと立ち上がった。

「ねぇ、ねぇ。あの人が副社長でしょう?確かテレビに出てたよね」

ついつい、聞き耳を立ててしまう。

「そうそう、アサナスポーツクラブの社長と会談してた。
私、アサナとここととどっちにしようか迷ったんだけど、
『誰でも出来て、必ず嵌ります』という言葉でノックアウトよ。
5分間のコンバット体操も速攻覚えちゃったし。
さっき、ランニングマシーンで平日のボディコンバットに来てるって言う
おばちゃんと話したけど、本当に嵌るらしいわよ。
施設も綺麗で徹底されているし、今のところ文句は無いわね。
でも、駄目だったらアサナに転向するけど」

アサナとFIE。首位争いは、切実なもの。
1位を守るために、真純は負担の大きい兼任の道を選んだのだ。

―　1位の座は絶対明け渡したくない　―

彼の思いのためにも、小さなミスもしてはならなかった。

第7話

「ほ、本田さん？」

「葉子ちゃん」

「ど、どうしたんですか？なぜ、こっちの受付に？」

1階ＦＩＥの受付に座っているこの女性。
この新しいＦＩＥに店を構える前まで臨時の花屋を出させてもらっていた
隣町にあるＦＩＥ支店の受付嬢のひとり、本田里香（ほんだりか）だ。

いるはずの無い人を見つけた私は、
思わずカウンターの中に身体を乗り出していた。

「ここの受付主任が緊急入院したでしょう。

それで、ピンチヒッターとして配属になったの」

「ええっ、そうなんですか。あ、…でもみんなと一緒じゃなくて寂しいですね」

突然の配属に本人もかなり動揺したに違いない。
表情がそう物語っていた。

「まぁね。でも、みんなもあなたに会いたがっていたわよ。また飲みに行こうって言ってた」

「ごめんなさい……連絡しようと思ってたんですけど。余裕がなくって…でももう大丈夫ですから、誘ってください」

「いいわね。じゃ、みんなに連絡とってみるわ」

「楽しみにしてます！えっと、じゃ今日のお花はこれを飾ってもらえますか？」

「はい、了解……あっ、副社長が来たわ。ほら、みんな立つわよ」

里香はそう言うと、隣に並ぶ若い受付嬢たちに指示をし立ち上がった。
玄関の向こうには黒塗りの車が停まっていて、
秘書の亜紀が車のドアを開けている。
最近の楽しみは、真純の出勤する姿を眺めることであった。

彼は、毎朝颯爽とやってくる。

軸の長い足を交互に出しながら、
挨拶をするスタッフに、軽く手を上げ返答するのだ。

『やぁ、おはよう！』

その、爽やかな彼の姿と声が大好き。
だが、今日は違った。
車から現れた真純の姿は、
まるで隠れ蓑にでも包んだかのように人だかりに消えたのだ。

女性の黄色い声援。
芸能人でいう追っかけのような感じだ。
その人だかりは、真純の歩む方向へと一緒に流れてゆく。
玄関の自動ドアが開くと同時に、ホール内に真純の低い声が響いた。

「すみません。急いでいるので……」

「サインですか？困ったなぁ。僕は一般人ですよ」

女性達より頭ふたつ分ほど出ている真純の表情は笑ってはいるものの、
物凄く困惑しているのが見て取れた。
腕時計をしきりに気にしながら、女性達の相手をしている。
その隣には亜紀もいて、彼女達にもみくちゃにされていた。

「あ、ここから先は、スポーツクラブに興味がある方だけどうぞ。
それでは、失礼」

ようやく、人だかりから解放されると、
もみくちゃにされていたふたりの全身の姿が露となった。

真純はずっと亜紀をガードしていたようで、大きな手は彼女の背中に回されている。
なんだかその姿に、胸がキュンと苦しくなった。

「大丈夫か？平井」

「ええ、大丈夫よ……真純くん。
あっ、ごめんなさい…副社長は大丈夫ですか」

「ああ、僕はね。驚いたな。あのテレビは影響力が強すぎる」

今まで出たテレビは、アサナスポーツクラブ社長との対談だったのだが、
昨日のテレビは視聴率の高いワイドショー。
密着と言う形で１５分間のものだったが、その反響は大きかった。
放映後すぐから問い合わせの電話が殺到して、電話回線がパンクしたらしい。

……と、そんなことはどうでもよかった。
今は、ふたりの姿が気になって気になって仕方が無い。

―　大丈夫か？平井　―

―　大丈夫よ……真純くん　―

心配げに声をかけた真純に、気丈に振舞う亜紀。

仕事のキリッとした雰囲気とは違う優しげな表情の彼と、
品があり女性らしい仕草の彼女の姿、
なんだか、ふたりが付き合っていた頃の場面が、一瞬垣間見えた気がした。
そんなオーラを纏ったままふたりの姿は
いつものように挨拶しながらエレベーターへと消えてゆく。
すると、その状況を見ていた本田が私の裾を引っ張った。

「葉子ちゃん、知ってる?あのふたり、付き合ってるらしいわよ」

「えっ?」

過去形ではなく現在形というところが妙に気になったが、
そのまま知らぬ振りをして彼女の話を聞き続けることにした。

「去年のクリスマスの夜。ふたりで過ごしていたらしいの」

「ええっ!!」

「凄い話でしょ」

本当に驚いた。

初めは、私と真純のことを言っているのかとも思ったのだが、ちょっと違う。
実質彼と過ごしたのは、イブからクリスマスの朝までだったからだ。
その噂の主ではなかった。

「ほら、バイトの薫ね。夜にバーの手伝いに行ってるのよ。
そこで、見かけたらしいの。あのふたり……美男美女だから目立ってたらしいわ」

うそ。

あの日は……あの日は……、
まだ鮮明に残っているイブの記憶から次の日の記憶を引っ張り出してゆく。

―　あ…、あの日は　―

そう、真純の携帯番号を知った私は、始めて彼に連絡を入れた。
だけど、コールを2回聞くことなく、事務的な女性の声での案内が始まった。

『今どき、電波の届かないところなんてエレベーターの中か、山の上ぐらいよ。
こんな案内流れたら、相手は嫌がってるって思ったら良いわ』

詩織の言葉を思い出して、彼が電話に出たくない状況だと知った。
出たくない状況……その時、真純は元カノと過ごしていたというのか。

心がドキドキし始めていた。

意外なところから出てきた彼の行動。
私は、何かの間違いだと心の中で打ち消した。

◇　◇　◇

「また、秘書さまから呼び出しよ」

詩織は、電話を切ると大きなため息をついた。

「ね、秘書だけど。葉子とあいつが付き合ってること知ってんじゃないの？
最近、呼び出しては葉子のアレンジにいちゃもん付けてるんでしょう？
こうなると嫌がらせとしか思えない」

『羽並さん、４階のラウンジにあるアレンジは施設に合わないわ。お客様から声が出てるの。せっかくの大人の雰囲気が台無しだって』

ラウンジは、プール、そしてスタジオが見下ろせる全面ガラス張りのギャラリーとなっている。
都会的な雰囲気のスペース。

もちろん、私の中ではその場所に似合う最高のアレンジをしているつもりだったし、
ＦＩＥ帰りの客も『ラウンジと同じ雰囲気の花束を』と注文し買ってゆく人も多く、
それなりに気に入ってくれているものだと思っていた。
だが亜紀からは、貧乏臭いとか、花の色のセンスが悪いとか、活け変える度に言われているのだ。

客からの声が出ていると言われると、そのままにしている訳にもいかず
アレンジをやり直した。
今までは、既成概念にとらわれない
のびのびとしたアレンジを意識してやっていたが、
最近は同じショーを繰り返すサーカスの虎のような気持ちで花器に向かう自分がいる。

「ふぅ」

長いため息をついた私は、ガラス窓にペタンと張り付くと、
スタジオにいる真純をジッと見下ろした。
彼はエクササイズが終わった後のようで、若い女の子達に囲まれている。
へそ出しルックで胸が強調されたショートトップスをきた女性達に
同じ女性なのにドキドキして。
仕事ではあるが、こんなスタイルのよい女性達を間近に見て
真純はなんとも思わないのだろうかと思ったりした。

「何見てるの？羽並さん」

「は、はい！すみません」

仕事をサボっている姿を見られ、いきなり声をかけられた私は、驚きすぎてよろめいていた。
ロボットのような動きで声がしたほうへと身体を向けると、ペコリと頭を下げる。
声をかけたのは亜紀だった。

「別にいいのよ。……もしかして、羽並さんってコンバットに興味があり？」

「え？」

「だって、夢見心地で見てた」

さすがに副社長を見ていたとは言えずに、『そ、そうですね』と返答していた。
もちろんそれは、そのままの意味で彼女に伝わったようで。

「えっ、そうなの！だったら、受けたらいいじゃない！」

今日の亜紀は、なんだか機嫌が良いようだ。
にっこりと笑うと私の隣にピタッとくっつき真純を指さす。

「コンバットプログラムは、キックボクシングがベースで、テコンドー、空手、ボクシングいろんな格闘技を組み合わせたエクササイズなの。
初心者ならば、ショートから始めればいいわ。
３０分間だから苦にもならないと思うし、それに」

「それに？」

「もれなく、クールダウンは副社長じきじきに簡単なマッサージをしてくれるわ。凄く気持ちがいいわよ」

―　へぇ～～　―

きっと、誰もいないところだったらこんな間の抜けた返事をしていたに違いなかった。
真純からのマッサージ、身も心も究極にほぐされるに違いない。
……って、凄く気持ちがいいということは、既に彼女は経験済みということなのか。

「平井さんもされているんですか？」

「ええ、私たちスタッフはお客様から説明を求められたら、

きちんと返事を返すことを原則としているの。
そのためには、実際に経験しないとね。
だから、休日の火曜日はそれぞれの人気プログラムを習っているのよ。
あ、確か花屋も同じ火曜定休でしょう？参加してみない？」

「え、いや…私は運動が苦手で」

「運動なんて慣れよ。花屋のもうひとりの彼女も連れてくるといいわ。
だと寂しくないでしょ」

「は、はぁ」

「じゃ、副社長に言っておくわね」

「え、ええ」

いつのまにか、彼女との密着度が大きくなり、
亜紀の豊満なバストに腕が当たっていた。

同性ながらもドキドキしている自分。
彼女の温かみが腕から身体へと伝わると、
この温かみを真純も感じたことがあるのだと気付き、気が滅入ってくる。

「羽並さん。お客さまの言葉とはいえ、
辛いことばかり言っちゃってごめんなさいね。でも、分かって。
私たちこのモデル店をＦＩＥの顔にしたくて必死なの。
それは、副社長の願いでもあるのよ」

それは、身に沁みて分かっていた。
彼女だって、秘書として真剣に仕事に取り組んでいる。
そんな彼女に対し、余計な個人的感情ばかり湧かせてしまう自分の心が
情けなくいやらしく思った。
これじゃいけないと自分を奮い立たせた。

「はい、私もまだまだ未熟なところばかりで。
皆さんの思いを無駄にしないよう頑張ります」

「その調子、羽並さん」

亜紀の笑顔に、私も笑顔を返す。

「じゃ、来週の火曜。午前１０時に来てね」

「えっ、来週ですか？」

心の準備が出来ずおろおろしていると、亜紀が背中に手を回し唇を耳に近づけた。
彼女の艶っぽい吐息が耳に当たり肩をすくめる。
悪戯っ子のような表情が、なんとなく真純の雰囲気と重なった。

「もしかして、彼とデートかな」

「いえ、そんなんじゃ…ないです」

「彼いないの？私、あなたを初めて見た時、真純くんのことを好きなんだと思ってたけど。彼フリーでしょ、アタックしてみれば？」

興味津々の亜紀の顔が見えた。
副社長はフリーなんかじゃない。私が恋人なの。
そんな心の訴えが、口に出ようとして…。

―　君には真純の恋人であるということを隠してもらいたい　―

社長の言葉が、理性を止めた。

きっと、彼の事を好きだと言うのもご法度になるのだろう。
……出来ればそのことに関しては、触れたくなかった。
否定も肯定も答えたくはない。嘘などつきたくないのだ。

「真純くんは、自信家で強引なところがあるけど、優しくて一途よ。
恋人にしたら大切に扱ってくれるわ」

大切に……彼女も真純に大切にされたんだと思う。
ふっと素に戻った彼女の表情が印象的。

「なんなら、私が彼に言ってあげましょうか？」

「そ、そんな、副社長に…そんな思いなど持ってないです。とんでもないです」

思わず出てしまった否定の言葉に、胸がえぐられたかのような痛みが走った。
嘘をつくことがこんなに悲しく苦しいことだなんて初めて知った。

真純を裏切ったような気持ちになり何度も何度も彼に謝っていた。

「あら、そうなんだ。それはごめんなさいね。
あ、時間が無いわ。じゃ、お花よろしく」

話を終わらせることには成功した。
だが、安堵の気持ち以上に後ろめたさで覆いつくされた心は晴れる事は無かった。

第8話

「だから、靴じゃなくて金かけるところはトレーニングウェアでしょう？」

「恥ずかしくて、一緒にいたくない」そう言いながら、詩織は私の背中をバチンと叩いた。

「だって、これしかなかったのよ。靴は、いいものをって店員さんから聞いて」

「だからと言って、高校のとき使ってた体操服ってのはないでしょう」

「えっ、朱色が可愛いじゃない。私好きだったわよ」

「でも、校章しっかりプリントしてあるし、背中も見てよ」

自分の胸に貼られている校章に気付き言葉を失くす。

「馬鹿よあんた。この姿、あいつに見られるのよ！
ちょっとは考えなさいよ」

しまった。そう思うのは後の祭りだ。
亜紀より動きやすい格好でと言われ、考え付いたのは高校時代の体操服。
本当は靴とウェアを買うつもりだったが、
店員から勧められた靴は予算オーバーで結局ウェアは断念せざるを得なかった。

確かに、後ろにある鏡で見ると背中に大きく高校名まで書いてある。
せめて、近所にあったお嬢様学校の聖華（せいか）付属だったら
状況は違ったかもしれないのに。
……そう思っても、もうすぐコンバットプログラムが始まるのだ。
今更、どうすることも出来なかった。

火曜日のＦＩＥは、一般会員がいないため人気も少なく閑散としていた。

その中でもやたらと多いのは、スタジオとプールで、全て職員ばか

り。
名前は知らないが挨拶くらいは交わす見慣れた人ばかりだ。

「私、ドキドキする」

さっきから詩織は、興奮する心を抑えきれないようで胸を押さえ続けていた。
『まるで、コンサートが始まる前みたい』
と、この30分だけで何度言ったことだろうか。
スタジオ内に響く重低音。
アップテンポのBGMが、昔行ったコンサートに重なるらしい。

「私もドキドキよ」

同じく、心臓が破裂しそうだ。
だがそれは、真純の姿を間近に見れることへのときめき。

「えー。水分補給は曲の間でも構いません。自由に取ってください。呼吸を止めると血圧が上がってしまうんで、僕と一緒に声を出しましょう。
声を出せばストレス発散になりますし、自然と腹式呼吸になり、お腹引き締めの効果も期待できます。
……あれ、山口マネージャー。僕と視線が合わなくなりましたね？私は前にいますが、日頃の鬱憤は十分に晴らして結構です。それで根に持ったりなど、決してしませんから」

「私に振るのは勘弁してくださいよ～チーフ」

以前真純の秘書をしていた男性が、顔を真っ赤にして俯いた。

いつの間にか現れた真純は、笑いの渦の中、首にかけていたタオルを外し
ヘッドマイクを取り付けている。
そして、誰かを探すように視線をゆっくりと動かし始めた。
その視線が、だんだん近づいてゆく。
そして、私の視線と交わった。

「えっと、今週、仲間が増えました。
皆さんもご存知だと思いますが、ＦＩＥを花で綺麗に飾って下さっている
はなみ花屋の店長羽並さんとスタッフの魚住さんです。前の方に出てきてくれますか？」

「いえ…わたしたちはここで」

前に出るなんて、そんな話は聞いていなかった。
スタジオ出口に近いこの場所で運動出来れば十分だった。
運動は大の苦手、それに大衆の面前に体操服姿を晒したくはなかったのだ。
私は両手をブンブン振りながら、真純の指示を無視する。
そして、前にいる誰かの陰に隠れ、逃れようとした。
だが真純は、無視を微笑で交わしながら私の方に近づき
手首をキュッと握り引っ張った。

「羽並さん、僕がついてるから恥ずかしがらないで。
ほら、魚住さんも一緒に来るんだ」

きっと、口を開けてぽぅっとしてるはず。
こんなに近くに彼を見るなど、どれくらい振りだろうか。

手を握られたのはいつだっただろうか。
胃の裏側辺りがきゅんと苦しくなって
熱い何かが湧きあがるのを感じていた。

夢見心地でぼんやりとした視界は、
彼の手が離れると共にクリアになっていった。
我に返ると、スタッフの先頭集団の中に入れられていてハッとする。
それも、真純の真向かいだ。
詩織と言えばちゃっかりと私の後ろに立っていて
現実を知り慌て始めると、なにやら話し声が聞こえてきた。

「ねぇ、アレってもしかして学校の体操服じゃない？」

「よく着て来れたよね」

「あの子場所が悪かったよな。平井さんの隣は可哀想だよ。
『月とすっぽん』ってあんな感じ？」

―　す、すっぽん！？　―

私の姿を物珍しく言うひそひそ声が、あちらこちらで聞こえてきたのだ。
自業自得とはいえ、興味にさらされた周りの視線が痛くてたまらない。
私は、隣の亜紀に視線を移すと苦笑しながらペコリとお辞儀した。

ため息が出るくらい亜紀のスタイルは完璧だ。
私とは違うかっこいいウェアで全身バチッと決めている。
身体のラインが良く分かる小さめのTシャツと、
Vフロントのストレッチパンツを着ている彼女は、メリハリのきいたスタイルで
ちらりと見えるお腹はすっきりと綺麗なラインだ。

私は、いわゆる痩せっぽちの中学生体型、それに追い討ちをかけるような体操服だ。
まぁ、すっぽんと言われても仕方が無かった。

真純は、室内のざわめきを止めるように咳払いをすると再び話し始めた。

「ここでひとつ。エクササイズは間違った方法のまま続けていると身体を痛めますし、
効果も半減します。恥ずかしがらなくてもいいので
自信のない方は羽並さんのように、僕が見えるところまで出てきてください」

私の気持ちなど気付いていない真純は、
私を目立たせることばかり言っている。
穴があったら顔だけでも突っ込みたいくらい恥ずかしい。

「じゃ、今日も楽しく行きましょう」

真純の指が軽く合図する。

それと同時に、足の裏から響きあがるような振動と音楽が鳴り響いた。

◇　◇　◇

「ああ、なんだかすっきり」

クールダウンも入れて３０分のコンバットプログラム。
汗が噴出すように首筋を流れ息が上がった時は途中で止めようかとも思ったが、
何とか最後までついていけた。
きつい大変という気持ちは、クールダウンに入った途端になくなり、
やり遂げた充実感に包まれる。

真純のマッサージは心地よく、つかの間の至福の時を過ごさせてもらった。
ヨガマットに横になった私達一人一人の足と腕をマッサージする。
ピンポイントに当たるツボの心地よい刺激と、
薄暗い照明の中、私は襲いくる睡魔に負けそうになった。
そんな中、彼がマイクなしの生の声をかけてくれる。

―　羽並さん、今日は、日頃使っていない筋肉を酷使したので、
ぬるめのお風呂に浸かって優しくマッサージしてあげてください。
最後までよく頑張りましたね　―

そっと声をかけてくれた彼の言葉は仕事モードだったが
低音で優しげな声がとても癒しになった。
ショートプログラムしか受けていないが、
人気ナンバーワンのプログラムの訳が分かった気がする。

頑張って、６０分のマスターを受けてみたくなる一般会員の気持ちが分かった。

◇　◇　◇

「どうして、断れないかな…でも、私はラッキー。ただ酒飲めるし」

呆れ果てた詩織は、ビールのお代わりを貰うとグッと一気に飲み干した。

ここは、ＦＩＥの二軒隣の居酒屋。

大広間を貸切っての飲み会になぜか私達も参加することになったのだ。

「だいたいね。葉子は人が良すぎるのよ。

秘書の口車に乗せられた事分かっていないの？

コンバットだって、この飲み会だって」

彼女は既に酔っているようで、

キッと睨みつけながらビールを水のように口に流し込んでいる。

「この際、あいつから乗り換えたら？

結構モテモテじゃない『体操服の羽並さん』で」

そう、この店に来てから、立ち代り入れ替わり男性達がやってくる。

あの体操服姿が癒しになったというのだ。

花を扱う凛とした姿と体操服の天然ボケキャラのギャップが面白いというのが

その理由というのだが。

多くの男性から囲まれチヤホヤされることなど、生まれて初めてのことで、

私はただ、しどろもどろで彼らの応対をするしかできなかった。

真純は、遠く離れた上座で次々にお酌に来るスタッフと話していた。
視線を向ければ、私が見える距離。
私のこの状況を見られるのはちょっとまずいかなとも思ったが、
真純とは全く視線が合うこともなく。
結局は、彼は私が在ることすら気付いていないのだと理解した。

「何、ふたりしてしけた顔して飲んで」

声かけてくれたのは、副社長へのお酌から戻ってきた本田だった。
彼女は、とっくりを見せるとお猪口を手渡してくる。
そのまま注がれ飲むよう促された。

熱燗は、喉元を通り過ぎ身体を火照らせる。
今まで男性達から飲まされたアルコール分が血流に乗り、一気に回っていく気がした。

「ほら、平井さんも連れてきたわよ……沢山飲ませて、あのこと聞かなきゃね」

―　えっ　―

本田は今の私の状況など知らない。
だから、彼女のひと言が残酷な刃になる事など予想も出来ないのだ。
平井も一足遅れて、「何のことなの」と笑いながら私の隣に座った。
赤ワインを注ぐとそれを揺らしそっと口に含む。

「葉子、明日も市場は早いんだから。もう帰りましょう」

詩織が気を利かせて、声をかけてくれた。
だが、そんな助けも空しく亜紀から腕をつかまれ止められた。

「羽並さん。私が厳しいから、嫌いになった？」

「そんなこと、ないです」

神妙な面持ちから、晴れやかな顔になった亜紀は
安堵の息をつきながら腕を組んでくる。

「じゃ、もう少しだけ…ねっ、羽並さん。……帰っちゃうと寂しいわ」

彼女を犬か猫に例えると断然猫だと思う。
それもリッチな家に居る長い毛の猫ってところ、
いつもキャリアウーマン的にパリッとした印象の彼女が、
ほろ酔いムードで甘えてこられると、なんだか悪い気がしなくなるのだ。
そんなに言ってくれるのなら、もうちょっと居てみようかなという気にさせる。

「あ、じゃ…もうちょっとだけ」

「本当に？嬉しいわ。じゃ、ワインで乾杯しましょ！
明日ちょっと寝坊してもいいように副社長に頼んでおくわ。
ほら、みんなもお酒注いで、乾杯よ」

知らないわよ…そんな表情の詩織に手を合わせながら、
心の中でもう少しだけだからと答えていた。

ワインを飲めば、ここに出ている全種類のお酒を飲んでしまうことになる。
そう思いながらも、亜紀の作る流れに逆らえないまま乾杯をすることになった。

「ＦＩＥ会員だったんですか？」

「そう。だから、大学生だった副社長がまだペーペーのインストラクターをしていた頃から知っているのよ」

「凄い」

亜紀の話にテーブルの皆が食いついていた。
彼女は、頬を赤く染めワインを口にしながら何かを思い出すようにうっとりと話している。
組まれた腕に当たる彼女の柔らかな胸がとても温かくて、彼女の気持ちが昂っているのを感じた。

なにがそうさせているかだなんて、聞かなくても分かる。
アルコールのせい？それもあるが、彼女は真純のことを想っているのだ。
亜紀はまだ真純のことが好きなのかもしれないと思った。

だったら、なぜ別れたのか？
その疑問は私の中で膨らむ一方で。

「ＦＩＥは長かったから、副社長秘書として私を雇ってくれたの。
……あらら、詩織さん寝ちゃったわね。退屈だったかしら？」

いつの間にか、テーブルにうつ伏せになった詩織から寝息が聞こえてきた。
今が、去り時。
亜紀の話が気になりながらも、
反面、真純との事を聞かずにホッとした私は帰る事にした。

「私、詩織を送りますので、そろそろ帰ります」

だが。

「私、新婚なんでそろそろ帰ります～。
魚住さんと近所なので、送り届けますよ。
羽並さんはもっと楽しんでいって下さい」

隣の男性が、詩織を送っていくといい始めたのだ。
かなり困った展開になった。

「いえ、いいです。明日も早いですし、ちょっと今日は飲みすぎたみたいで」

私のそんな言葉は、亜紀と周りのスタッフにもみ消された。

男性スタッフ達の「羽並ちゃんは、俺が送っていくよ」との言葉に場は盛り上がり、
冷やかされて酒まで飲まされ、その間に、詩織は起こされて連れ出されていった。

詩織が居なくなるとなんだか急に不安になった。
この上がり過ぎたテンションに呑み込まれつつある自分が怖くなった。
自分がどれだけの酒を飲んだのかも分からない。
ただ、生まれて初めての酒の量である事は、なんとなく予想はついていた。

「私もね。秘書になった経緯なんて聞かなくてもいいの」

突然の言葉に、テーブル内の私へ向けられていた視線が
全て本田のひとことへ向けられた。
アルコールに頭を犯されている私でも、
この先彼女が何を言わんとしているかは理解できた。

「で、ここだけの話。平井さんと副社長って恋人同士なんでしょ？
知ってるのよ、去年のクリスマス一緒に過ごしてたこと。白状しなさい」

「副社長と平井さんが！やっぱり、そうだと思った」

「私も思ってた」

―　副社長の恋人は、私なの！！　―

そんなことも言えないまま、胸が押しつぶされそうなくらい苦しくなった。

私は蚊帳の外となり、

テーブルには、亜紀の答えを聞こうというスタッフが身を乗り出している。

亜紀は、声も出ないくらいに驚き目をまん丸に開けていたが、観念したように口を開いた。

組まれた腕に力が入る。

亜紀の柔らかな胸の膨らみは、更に温度を上げていた。

「そうね。あの日、朝帰りだったわ」

唖然として彼女を見る。

その視線に気付いた亜紀は、私を優しく見下ろした。

「大っぴらには出来ないけど、復縁しようかな…と思ってる」

彼女の艶を含んだ声、私の頬に甘い吐息を運んだ。

第9話

―　大っぴらには出来ないけど、復縁しようかな…と思ってる　―

周りの異様な盛り上がりをよそに、私のテンションは下がる一方だった。
目の前に注がれていたワインをグッと飲み干すとさらに注ぎ足した。

「復縁ということは、恋人同士だったってわけ？
で、クリスマスに出逢って焼けぼっくいに火がついちゃったって事なのね」

本田は、探偵のように顎に手を当てながら推理したことを話す。
最後に亜紀へ振ると彼女は顔を真っ赤にしながら俯いた。

「ご想像にお任せするわ。だけど、復縁したら、
真純くんの事もう離したりしないって思ってる。
彼とは結婚するはずだったの。だけど、彼の忙しさは普通じゃないでしょ
だから私、子供のように拗ねてしまったのよ。
だけど別れてはじめて彼のよさが分かった。
彼が一途に女性を愛することが分かったから」

「復縁したらって、もうそんな関係なんじゃないの？」

「もう、はっきり言うわね本田さん。今はただ大人の付き合いよ。
実は彼、切れない女性がいるみたいなの。もちろん、ここだけの話」

ガシャン！！

手が震えワイングラスを倒してしまった私は、
ごめんなさいと何度も言いながらハンカチでテーブルを拭いた。
周りが心配しておてふきを投げてくれても、そんな気遣いすら気付く余裕がなかった。
胸の底から湧き上がる悲しさと苦しみで、いてもたってもいられない。

「話の途中でごめんなさい……ちょっと私、ハンカチを洗ってきます」

ようやく、テーブルから立ち上がった。
足はアルコールのせいで歩くのがやっと。
ぼんやりとした視界の中ようやく洗面所を探し出し、ドアを開くと洗面台へと伝え歩く。
鏡の中には、ノーブランドの服を来た品疎な自分の姿が映り、
パッとしない顔を見ると、全てに整っている亜紀と比べた。

「うっ……うう…」

涙が溢れてきた。
結婚するはずだったふたり。
そんなにも彼女に対し愛情を持っていた真純の事を
彼女の口から語られたのがやけにリアルで。
クリスマスの朝帰りだって、

あの時電話がかかってこなかったことを思い出しリアルさが増した。
ふたりが復縁できないのは、本当に自分のせい？そう思うと、
ふたりの中にいる自分が悪女のように思えてきた。

「私って、恋人だったよね」

大っぴらに恋人を名乗れない自分。
気持ちをひた隠しにしなければならない関係、デートすら出来ない
間柄。
それでも冷静にいられる真純は、自分に対しての愛情が冷めている
んじゃないかと思った。
思いの天秤は、亜紀の言うとおり彼女に軍配が上がっているのじゃ
ないかと。
全てがマイナス志向へ傾いてしまう。

化粧が剥がれ涙で濡れたこの顔で、飲み会に戻ることは出来なくな
った私は、
ハンカチを洗い終わると皆のところには帰らず、出口からふらりと
外に出た。

「ごめんなさい」

後から出てきた見覚えのあるＦＩＥの男性とぶつかりあやまる。

「いえ、こちらこそ。僕も帰るんで送っていきましょうか？」

「いえ、大丈夫です。すぐ近くですから」

「そう。じゃ、お疲れ様」

その男性はタクシーを拾うといなくなった。
私は寒さでぶるっと身震いすると、着てきたコートを店に忘れてきたことを思い出す。
だが、そのまま歩き出した。コートなんてどうでもよかった。
自分がどうなろうがどうだっていいと思った。

◇　◇　◇

「ああ、気分が悪い……」

あまりの気分の悪さに目が覚めた私は、そのままトイレへと駆け込んでいた。
頭は割れるように痛み、視界がぐるぐると回り、そのままトイレから出れなくなる。
これが二日酔いというものだろうか。酒を飲みすぎたことを後悔した。
すると、電話のベルが鳴り始めた。
動けない私にベルは容赦なく鳴り続け、ピタリと止まる。
そして、吐き終わりようやく部屋に戻ると再び鳴り出した。

「は…い」

再び襲ってくる気分の悪さと戦いながら電話に出た。

「葉子!!あんたなにやってんの!」

その声は、詩織。
二日酔いには辛すぎるくらいの大声を張り上げている。

「何よ。うるさいわ」

「何がうるさいよ!!あんた、今まで何やってたの!!
電話にも出ないし部屋にも居ないし。今何時と思ってるの!!!」

「え?」

煩わしそうに返事をしながら、壁に掛けられている時計を見た。
目がぼやける。ゴシゴシと目を擦ると愕然とした。

「なんで??」

目の前のカーテンをサッと開ける。
外は大雨で、まだ夜が明けないんじゃないかというくらいに薄暗い。

時間は午前１０時、雨のため外が暗いのだ。
カーテンを閉めるとほとんど夜のような感じだった。
受話器を持つ手が震える。火照る顔がまた一層熱くなってゆく。

「あんた、市場も店もすっぽかして何してたのよ!!
副社長も秘書もカンカンに怒っているわよ。今日は店は休めだって!
ＦＩＥの以前契約していた花屋から取るんだってよ。
あんた何やってんのよ…昨日は男と帰ったらしいじゃない。まさか、
あんた」

「何言ってるの。私はひとりで帰ったわ。家にだって居た。二日酔いで熟睡して分からなかったの。本当にごめん。詩織」

「社会人でしょ。そんな言い訳通じないわよ！！私ひとり、どのくらい怒られたと思うの」

涙声になる詩織など初めてのことであった。
相当に怒られたのだろう。もっとも、詩織の言うとおりだ。
二日酔いで寝すぎただなんて、理由になどならない。
ガシャンと切られた電話が詩織の怒りの度合いを表していた。

第１０話

「本当に、申し訳ありません！！」

私は、ＦＩＥの副社長室にいた。
デスクでパソコンを打つ真純と腕組みして呆れた表情の亜紀に頭を下げた。

「私もね、悪いと思うのよ。『ちょっと寝坊してもいいように副社長に頼んでおく』
なんて言ってしまったから信じてしまったのね。ごめんなさいね」

「いえ…全て私が悪いのです。気持ちが弛んでいたんです」

どう謝っても謝り尽くせなかった。
自分の仕出かしたことで、全てに迷惑を掛けたのだ。
きっと、急な花の手配などで余計な仕事を増やし、ＦＩＥを混乱させたに違いない。

真純は、私の方を見ることもなく、パソコンを打ち続けていた。
明らかに怒っている事が表情とキーボードの扱いに出ている。

未だ出ない彼のひと言がとても怖かった。

「以前契約していた花屋に急遽作ってもらったから、安心して。…だけど、やはり今回だけ、という訳にもいかないでしょう？だから、1ヶ月は、その花屋のアレンジを入れることにする。…そう会議で決まったわ。副社長も同意済みよ。苦渋の決断、分かってもらえるわよね」

「は、はい」

仕方ないことだ。

大変な失敗をしてすぐに許されるとは思っていなかった。

だが、1ヶ月間、ＦＩＥからの収入がなくなるのは、大変な痛手。

己の馬鹿さを責め続けた。

「本当にごめんなさいね……」

「平井、別にうちが謝ることじゃない」

ようやく、ノートパソコンを閉じた真純が声を発した。

目尻を上げ、今までに聞いたこともないような冷たい声で、更に言葉を続けた。

「僕は、はなみの仕事をずっと見てきたつもりだ。君の仕事の姿勢とアレンジをかっていた。だが、こんな形で裏切られるのならば、見る目がなかったか、選択ミスだったと言える」

胸が痛い……。

彼にこんなことを言わせてしまった自分が嫌になる。

「副社長、もうよろしいではありませんか。
私が無理に誘ってしまったのも原因なんですから」

「もういいから。平井は仕事に戻ってくれ！」

「は…、はい」

真純より一喝されると、平井は、私に一礼し部屋を出て行った。

副社長室に真純とふたりきりになった。
ずっとずっと待ち焦がれたそのシチュエーションは、
嬉しいものではなく、針の筵のような最悪な状況となっていた。

冷たく視線を向ける真純と、悲しげに見返す私の視線が交わった。

静寂の中、視線が離れることはない。
だが、その複雑な空気を切るように、再び真純が声を発した。

「平井から、最近の君はアレンジに集中できていないと聞いている。
ミスがあったり、アレンジが場にあっていないことが続いたらしいね」

「は、はい…申し訳ありません」

全て報告されている。
自分の不甲斐なさを彼に知られるのは、丸裸にされるより恥ずかしい。

真純は、深々と座った椅子の向きをくるりとかえると、窓の外を見つめた。

「恋愛もほどほどにしないとな。浮かれ気分が仕事に出ているんじゃないか？」

「えっ？」

真純の言っている意味が分からなかった。

ゆっくりと立ち上がった真純に問いかける。

「副社長、どういう意味ですか？」

浮かれてなんていない。

恋人と接点がないのだから浮かれることなんて出来ないのだ。

彼は当事者なのにどうしてそんなことをいうのか。

真純は、眉間に深い皺を寄せ、咳払いをすると見覚えのあるコートを差し出した。

「昨日、うちの職員と抜け出したそうじゃないか……。家にはいない、電話にも出ない…。アルコールの匂いをプンプンさせて朝帰りか？遊ぶのは勝手だが、仕事はきちんとして欲しいものだ」

息が出来なくなった。

目の前にいるこの人物が、本当に真純と同一人物なのかと思った。

何を勘違いしているのか分からないが、

遊ぶのは勝手だと言われて腹が立った。

遊ぶのは勝手だと思っているからこそ、
元カノと自分を天秤にかけれるのか？
そこに繋がった。

「ほら、昨日店にコートを忘れただろう。これを持って、今日は帰れ」

「真純さん……」

「副社長だ」

私は、大きく息を吸い込んだ。
溢れ出てきそうになる涙を堪えるために唇を噛み締めた。
唇が切れ、血の味が口に広がる。

「わ…私は、切れない女性なんかじゃないわ……私は、縋る女じゃない。
結婚したい人がいるんだったら、きっぱりとふればよかったのよ！
『遊ぶのは勝手』よく言うわ、私は遊んでなんかないし
一途にあなたを思ってるのに……あなたは…」

「何を言ってる？」

真純は、奇妙な顔をしながらコートを羽織った。
冷静な彼の前で嫉妬に狂わされ吼え続ける自分が醜かった。

「心が繋がっていれば、表向きの名前なんて要らないって思っていた。
だけど、不安で仕方がない、自分に自信がもてない、
あなたの恋人だと宣言したい。……その時点でルール違反。

あなたを愛する資格を失くしたのよ」

私の異変に気がついたのだろう。彼は、私のそばに来た。

「葉子…さん?どうしたんだ?」

腕に手を掛ける真純を振り切った。

「別れましょう……」

そう言い残して、部屋を飛び出した。

非常階段を下りるのは、二日酔いの身体では辛いばかりだ。

涙は拭いても拭いても洪水のように溢れてくる。

途中気分が悪くなると踊り場でひと休憩し、また降りるを繰り返した。

非常階段は静まり返っていた。もちろん、真純の靴音は聞こえない。

結局、それが彼の答えなのかもしれない。

「なんてこと、言っちゃったんだろう」

それは、自分の中に湧く醜い嫉妬から解き放たれたかったからだ。

けれど、別れの悲しみは、嫉妬の痛みより苦しい。

二股かけられようが、ないがしろにされようが、

やはり、真純を愛す気持ちに変わりはなかった……いまさらだが。

私は、ようやく1階までたどり着いた。
重い非常ドアを開けるとカフェの隣に出る。
気分が悪く眩暈が酷い、そんな最悪な状況の中、受付に真純の姿を見つけた。
彼は受付の本田に挨拶した後、私に近づいてきた。

「どうして具合悪いのに階段で降りるんだ。探したじゃないか」

怒った表情の真純でも、気持ちが緩んでゆく。
気が遠くなった私は、足元から崩れ落ちていた。

◇　◇　◇

「葉子、気がついたのね……」

目を開けた私の前には、心配そうに身を乗り出す詩織がいた。

「ごめん、葉子……あいつからあんまりきついこと言われたから、葉子に八つ当たりしたの。本当にごめん…ごめん」

「…何言ってるの、あれくらい言われて当然よ。
私…、店長の責任を軽く見ていたのよ」

そこは、ＦＩＥの健康診断などで利用する病院だった。
受付で倒れてから、ぷっつりと記憶がない。
周りを見回すと、あの時そばにいたはずの真純の姿はなく、
女医の姿だけが見えた。
彼女は、薬袋をヒラヒラと振って見せると、枕元に置いた。

「羽並さん、二日酔いプラス風邪をこじらせているわ。
最近体調おかしくなかったの？こんな高い熱でよく来れたわね。
きつかったでしょう」

「熱が？」

自分の健康状態なんて、全然把握していなかった。
恋愛のことばかりで、肝心なことを忘れそうになっている自分に気付いた。

「落ち着いたら魚住さんに自宅まで送ってもらいなさい。１週間は静養よ」

「ええっ、でも仕事が」

「大丈夫、ＦＩＥ副社長がそう指示したの」

「副社長が？」

更に迷惑をかけた……このまま、花屋撤退を告げられるんじゃないかと思うと、
身体が震えてくる。
しかし、ふたりの会話を聞いていた詩織が口を挟んだ。

「倒れた葉子を副社長が運んでくれたんだって。いいわね葉子、あんなに想われて。
もう、よその男に走るんじゃないわよ」

「だから、どうしてそうなるの？」

私を知り尽くしている彼女の言葉とは思えなかった。

「私は、昨日ひとりで帰ったんだって。いくら二日酔いでも記憶はあるわ」

「だって、あんたとＦＩＥの男子職員が一緒に店を出るのを見たって、
今朝のＦＩＥは大騒ぎだったのよ。あんた凄い酔っていたらしいから……もしかしてって」

「え～～～っ！」

ふと、昨日のことを思い出した。
確かに、あの時ＦＩＥの人と一緒に店を出た。
ぶつかって謝って、そのまま外に。それを誰かが見ていたのだろう。
私は、詩織にそのままのことを話した。

「そうよね。あんたが男を天秤にかけた日には、この世も終わりよ」

褒めてるのか皮肉っているのか分からない、いつもの言い方の詩織に安堵する。
でも休みを伝えられた彼女が、どうしてここにいるのかが分からなかった。

「どうして詩織がここに？」

詩織は、真純が連絡してくれたのだと言った。

「あいつさ、あんなクールな態度を取っているけど、内心凄い葛藤をしてるみたいよ」

詩織が言うあいつとは、真純のことだった。

午前3時半、迎えに来ない私を心配した詩織は、アパートまでやってきたというのだ。

そこには真純がいた。

飲み会で着ていたスーツにコートのスタイルで彼はドアの前にもたれかかっていた。

第11話

真純は、ドアの前に寄りかかっていた。

『あれ、あんた。こんな時間に何してんの…うわっ、酒臭い』

詩織の言葉に、空笑いした真純はズボンのポケットから手を出し腕組みした。

『恋人の帰り待ってんの』

『嫌ね、酔っ払いのストーカーみたい』

『ストーカーか』真純は、詩織の言葉を復唱していた。

『まだ、ストーカーの方が葉子さんも喜ぶかもな。ずっと近くにいてくれるからな』

うまく切り返してくる真純の話術はどこにもなかった。奥歯に物が挟まったような返事に詩織は首を傾げた。

『やけに今日は弱気ね。あなたひとり?私てっきり2次会3次会は葉子を誘ったんだと思ってた。だから電話も出ないんだと…違った

のね』

『葉子さんは、いないみたいだよ。部屋の中は物音ひとつしない』

『そんなはずないでしょ。今日、仕事なのよ！』

詩織がドアを叩きチャイムを鳴らす間、真純は柵に腕を乗せ、ビルに囲まれた景色を眺めていた。部屋からの反応がなく叩くのを止めると、大きなため息をつく。白い息は空に舞い上がり、瞬く間に消えていった。

『ねぇ、詩織さん。君と葉子さんて仲良しだろう……答えてくれないか』

弱々しい彼の背中を見るのは、詩織自身初めてだった。

『葉子さんは、僕を恋人に持って本当に幸せなんだろうか。もっと、時間を作ってくれる男性（ひと）がいいと思ったりしないのだろうか』

葉子の気持ちは、幸せだと分かる。

だけど彼女の置かれている状況を見て、決して幸せいっぱいとは思えなかった。

まっ、真純以外の男に目移りすることは無いが。

『あなたは、葉子を幸せに出来てると思っているの？』

『……』

真純の無言の時間が、彼の気持ちを表しているように感じた。

『多分葉子さんは、社長から言われた時点ではここまでの現実を想定していなかった気がするんだ。僕がインストラクターの仕事についてからは、
彼女に恋人らしいことひとつもしてあげてない。
会うことも甘えさせることも出来ていない。
まぁ…そんな状況で、「彼女が幸せか」なんて聞く方がおかしいよな』

『そうね』

詩織は、振り返った真純を睨みつけると話を続けた。

『あの子ね。自分じゃまったく気がついてないけど、あんたを好きになってから
凄く綺麗になった。外見もそれ以上に内面が魅力的になった。
昨日の飲み会だってモテモテだったでしょ。あんたも気付いていたわよね。
ずっと、葉子を見てたんですものね』

『ああ…。見られてたか……参ったな』

頭を掻く真純に、残酷だと思ったが不安を植えつけることにした。
葉子を大切にしろという気持ちを込めて。

『だから、もし葉子の心が変わったとしてもあなたは葉子を責めることは
出来ないの。分かってるでしょ?』

真純は、『ああ、分かってる。……だけど』と言いながら再び頭を掻いた。
不安や緊張、困惑などを意味したその仕草。思い当たる節があるようなその言葉に、
詩織は突っ込みを入れた。

『なんか意味深ね？私にそんなことを聞いたりして、葉子と何かあったの？』

『いや、なにも…』

◇　◇　◇

「多分あいつ、あの時点から葉子の話を聞いていたのよ」

―　葉子さんは、僕を恋人に持って本当に幸せなんだろうか。
もっと、時間を作ってくれる男性（ひと）がいいと思ったりしないのだろうか　―

彼がそんな葛藤を持ち続け、苦しんでいただなんて思わなかった。

そんな葛藤を揺らがすような私の噂に、彼が大きなショックを受けた事が
手に取るように分かった。きっと、責めることが出来ない自分の立場と
嫉妬との葛藤に苦しんだ。それが、あんな冷たい言葉として出てきたのだ。

でも、分からない……彼の状況は、亜紀の言葉とあまりにも違いすぎるのだ。

「でも、もう駄目だわ」

「何が駄目なのよ」

「私、彼に別れるって言ったの」

「えっ、なんですって！」

再び涙が出そうになる。私は布団の中に潜った。

◇　◇　◇

「ちょっと、待ってて。黒田さんにお粥頼んだのよ。お持ち帰りでね」

詩織は、そう言いながらカフェパティオの中へと入っていった。
午後は主婦層の利用でいっぱいのカフェ。だが、財布の紐の硬い主婦層は
あまり花を買ってはくれない。花より団子、ケーキセットが良く出るという。

「羽並さん、大丈夫？」

肩を叩かれ振り向いた私は、胸が苦しくなっていた。
そこには、満面笑みの平井がいて、お洒落な籠に入った果物を差し出した。

「よかったら、食べて。風邪こじらせていたんですってね」

「すみません。また、ご迷惑をおかけします」

「いいの。ゆっくり静養して、こっちの方は気にしなくてもいいから」

「はい、ありがとうございます」

私は、亜紀から果物を受け取った。
彼女のきめ細やかな肌と私のカサついた指先が当たる。
すると、彼女の声が耳元で聞こえた。

「……あなたみたいな女性に、真純が本気になるなんて思ったら大間違いよ。
身の程を知りなさい」

彼女の穏やか過ぎる声と、言葉のギャップがあまりにも大きくて、それがどういう意味なのか理解するのに時間がかかった。
果物から亜紀に視線を上げると、変わらずに微笑みかける彼女が見えた。

「別れて正解よ、羽並さん。あなたにお似合いの男性は、その辺歩けばどこにでもいる。仕事も満足に出来ない、借金まみれの女性に
真純の恋人は務まらないわ。それくらい分かってるでしょ」

全身が震えて果物にかけられたビニールがカサカサと音を立てていた。
亜紀から侮辱されても言い返すことは出来なかった。
彼女は決して嘘は言っていないのだ。
でも、泣くことはしたくなかった。泣いたらさらに惨めな女になる。

「真純には、もう近づかないで」

カフェから詩織の姿が見えると、平井は、距離をとり、くるりと踵を返した。

「平井さんが、葉子に何の用？」

詩織の皮肉めいた言葉にも動じず、彼女は、振り返ることもなくこう言った。

「羽並さんへ、今回のミスは人生勉強だったって教えてあげてたのよ。ねっ、羽並さん」

「え…ええ」

「本当なの？葉子」

「う、うん」

私は、ずっと涙を堪えていた。
張り裂けそうな胸の痛みを握り締めた拳で誤魔化す。
そして、そのまま詩織の車へと乗り込んだ。詩織は、心配そうに私を見ると
肩を優しく叩いてくれた。

「さっ、1週間は何も考えずにゆっくりしましょ。神様がくれた休息だと思って
……あいつの事は、その後でもいいわよ。
あいつは、あんたを一途に思ってるんだから、
ゆっくり話し合えば別れるって言葉ないことにしてくれる。
でも、はっきり言って仕事の上司にはしたくないタイプね。
ホント怖かったんだから、まだ、感情的にガミガミ言われるほうがましだわ……」

そんな詩織の言葉は、私の混乱と緊張を解きほぐし心を癒してゆく。
涙が堰を切って溢れ出した。

「何、私感動させる言葉言っちゃった？」

「いろんなことがあって、涙もろいのよ」

「そっか」

詩織は、満足そうにハンドルに手を掛けた。

「大丈夫、自分に自信を持って。あんたは、あいつと付き合い始めていい女になった。
あんな鼻高女には負けてないわよ」

「ありがとう」

「葉子…？」

詩織の言葉は温かく私を包んでくれ、ありがたかった。
だが今の、何もかもが中途半葉で未熟すぎる自分では、
真純に似合う女性になどなりきれないのだ。
涙は止まらなかった、嗚咽も止まらなかった。
詩織の下腿に顔を埋め、子供のようにわぁわぁ泣く。

この涙で、真純と距離を置く覚悟が出来ればいいと思っていた。

第１２話

そうね。あの日、朝帰りだったわ。

大っぴらには出来ないけど、復縁しようかな…と思ってる。

仕事も満足に出来ない、借金まみれの女性に真純の恋人は務まらないわ。

亜紀の言葉は、私をどん底に突き落としていた。

体調不良も重なり、休暇中寝たきりで過ごした。

毎日毎日、熱にうなされた私は、うわ言を言っているらしい。
そう、詩織から聞いた。
『私じゃあなたは幸せになれないの……』と。

そして、夢の中で『別れたくない』
と懇願していた真純は、体調が良くなるのと同時に変化し、
亜紀と仲睦まじく並ぶ姿に変わっていった。
それは、まるで予知夢のようにリアルな姿だった。

『結局は、これでよかったんだよ……葉子さん』

今日は、別れに肯定的な真純の言葉で起こされた。

ドンドンドンドン……！
ドンドンドンドン……！

私は、聞こえ始めた現実の音に耳を塞いでいた。
詩織が叩くドアの音よりも激しい音、それは真純がアパートのドアを叩く音。
私は、いつものように息を潜め気配を消した。

私が病欠で休んでから、真純は出勤前のこの時間に私のアパートを訪れる。

こんな形で追い返すことがお互いにとってよくないことくらい分かっていながらも、
彼と顔を合わせることは出来なかった。顔を合わせればいろんな想いが溢れ出す……、
出来れば自然消滅で、真純が呆れ果てるのを待ちたかった。

「葉子さん！」

真純の声が聞こえてきた。
この声をもう何十回聞いただろうか。布団から飛び出し、
薄っぺらのドアを開けたくなる気持ちを堪えながら、ジッと真純の様子を伺った。
すると、声は聞こえなくなった。ドアにもたれかかるような物音が聞こえた後、
ゆっくりとした低声が部屋に響いた。

「葉子さん、いるんだろう？」

胸がギュッと潰されそうになった。乱れ気味の呼吸がピタッと止まり苦しくなった。
彼は私が居留守を使っていることを知っていたのだ。その理由はすぐに分かった。

「詩織さんから聞いた。あの日、君がＦＩＥの人と一緒に過ごしたんじゃないってこと。
僕は、君に酷いことばかり言ったよ。寂しい思いばかりさせた挙句、
噂を信じて疑った……嫌われて別れを告げられても仕方がないと思っている。

社長が決めたこととはいえ、元彼女をそばに置いた事だって……すまない。
でも、少しだけ話をしてくれないか。お願いだ」

違うんだと言いたかった。真純のことを嫌っている訳ではない、全ては自分の至らなさのせいなのだと言いたかった。
だが、込み上げてきた言葉がどうしても喉に引っかかり、伝えることが出来なかった。
扉を挟んだ沈黙の時間が、ゆっくりと過ぎ去ってゆく。
その沈黙を、真純のため息が破った。

「話もしてくれないのか？」

ドアから真純の気配が消えたかと思うと、階段を下りて行く音が聞こえてきた。
真純から嫌われたことを悟る。
自業自得とはいえ、涙が自然と溢れてきた。

第１３話

「あんたは、生もの。カビ生えちゃうわよ！」

休暇６日目、そう言って詩織に連れて来られたのは隠れ家的なバーだった。
黒を貴重とした都会的な雰囲気の店。２階を見上げると個室の窓ガラスに
ランプの炎がチラチラと揺れるのが見えた。
詩織曰く、２階は、恋人達に人気のプライベートルームだそうだ。
間接照明とテーブルの上にあるランプの光は、客の心をしっとりと癒してくれている。
詩織はワインを頼むと私に言った。

「ここ、なかなかいいでしょう？
ほら、受付の本田さんの友達が働いているっていう店よ」

はたと、記憶が蘇った。
そう、この店は亜紀が真純とクリスマスの夜に来ていたという店だったのだ。
胸を刃物で切られたかと思うぐらいの痛みが走る。

去年のクリスマス、もしかして２階の個室でふたりは過ごしていたのだろうか。
そんな妄想は、店員の運んできたワインと料理で消された。

「じゃ、葉子の全快を祝って乾杯！」

私の心とは裏腹に、グラスは心地よい音を立ててぶつかった。
赤葡萄の香りがふわりと鼻腔に届くと二日酔いの最悪な記憶が思い出されたが、
喉元を過ぎるとアルコール効果で苦しい気持ちが消えてなくなった。
詩織は、たわいもない話をしてくれた。真純のことを忘れさせてくれるかのように。

「それでね、葉子。うちのお母さんが……わっ、最悪」

それは、突然のことであった。
話を途中で切った詩織が、顔を隠すように俯いたのだ。
私の後ろの席に客が来たことが靴音で分かる。
テーブルに着いた数人の女性の声が背後で聞こえ始めると、
詩織はようやく顔を上げた。

「どうしたの？」

「いや、……あのね。葉子の後ろに秘書が座ったの。まずいなぁ」

その女性は、亜紀だったのだ。
耳を澄ますと彼女の色っぽい声が聞こえてくる。
プライベートの友人と来ている様で、時々弾けた笑い声が聞こえてきた。
彼女の声が聞こえてくると、まるで条件反射のように辛くなる。
また、醜い嫉妬と自信喪失の感情と戦うことになるからだ。

「ちょ、ちょっと葉子飲みながら待ってて」

「えっ！」

短時間でもひとりにされるのは、嫌。
彼女の話し声が、直で耳に入ってくるから。

「詩織……」

「すぐ帰ってくるから、ねっ。ちょっと、電話をするだけだから」

「今じゃなくてもいいじゃない」

「ホント、ごめん」

懇願にも、詩織は聞いてくれなかった。
苦笑しながら、私の手をポンポンと叩き離れてゆく。ひとりになると凄く不安になった。
周りの状況はざわざわしているのに、亜紀の声だけが耳につき始めた。

詩織は長電話しているようで２０分たっても３０分経っても戻ってはこなかった。
後ろの席の亜紀は、次第にアルコールの量が増え、笑い声が多くなる。
その内、話は恋人の事になった。

「亜紀はどうなの？ほら、あの副社長。切れない女がいるって言ってたでしょう？」

胸がドキドキし始めた。

自分のことを話題にされているというのは耐え難いことだ。
凄い悪女に聞こえる。

「ああ、その娘(こ)なら、別れさせたわ」

亜紀の爆弾発言に友人達がどよめいた。
興味深々に理由を聞いてくる。
週刊誌でもない身近なドラマに誰もが釘付けになっているようだ。

「真純はね。仕事に関しては凄く厳しくってね。
だから、彼女の失敗ばかりを報告してやったの」

「そんなに、仕事が出来ない女だったの？」

亜紀は、友人のそんな言葉にため息をつくとこう言った。

「出来たから困ったのよ。だから、細工をさせてもらったわ……。
わざと花の場所を変えてみたり、アレンジに手を加えてみたり。
ほら、あなたたちにも頼んだじゃない。花のセンスが悪いってアンケートに書いてって」

ワインを持つ手がブルブルと震え始めていた。
自分の失敗ではなかった、全ては亜紀が仕組んだことだったのだ。

「そういう事だったのね。亜紀、こわ～い」

亜紀の口調は、変わらなかった。
悪びれることもなく、逆にしてやったと言わんばかりに明るい声、
そんな口調は、少しトーンダウンした。

「だけどね。そんな細工をしても、真純はあの女の肩ばかり持つのよ……凄く悔しかったわ。彼の目は、いつもあの人ばかりを追っていて、
復縁を迫っても断られた。再会した時までは、私に想いが残っていたのによ……。
そんな簡単に気持ちが離れていったのが、悔しくてたまらなかったの。
だってね……これといって美人でもない、花だけがとりえの借金まみれの子。
どうして、真純が……あんな子に夢中になるのよ！」

真純の直向な愛情が、亜紀の言葉から伝わってくる。
同時に、彼の視線に鈍感すぎた自分に腹が立っていた。
どうして、元カノの話を一番に信じてしまったのだろうと……責めても責めても、もう遅すぎた。

亜紀は、泣いているのだろう。
くぐもった声で「だから……」と言った。
だが、その声は、低音の声にかき消された。

「だから、葉子さんに僕と平井の仲を勘違いさせたのか？
彼女の心を揺さぶって酒に呑まれる様に仕向けたのか？
彼女に大きなミスをさせて、僕との仲を壊そうとしたのか！……平井！」

「真純く……ん、ああ、うそ…どうして」

いつの間にか私のテーブルの横には、
唖然とする真純と仁王立ちで立つ詩織の姿があった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1507y/

私の彼は副社長　　2nd season

2012年1月6日14時45分発行